

我妻栄の青春(5)

七戸, 克彦
九州大学大学院法学研究院 : 教授

<https://doi.org/10.15017/4796020>

出版情報 : 法政研究. 89 (1), pp.195-262, 2022-07-29. Hosei Gakkai (Institute for Law and Politics) Kyushu University

バージョン :

権利関係 :

我妻栄の青春（5）

七 戸 克 彦

- I プロローグ
 - 1 日本民法学の時代区分
 - 2 我妻法学の時代区分 …………… 以上 88 巻 1 号
- II 幼年時代（明治 30～36 年：0～5 歳）
 - 1 郷土
 - 2 家庭 …………… 以上 88 巻 2 号
- III 興譲尋常高等小学校時代（明治 36～42 年：6～11 歳）
 - 1 操行=乙
 - 2 同年代との比較 …………… 以上 88 巻 3 号
- IV 米沢中学校時代（明治 42～大正 3 年：12～16 歳）
 - 1 チャッカリ秀才
 - 2 米沢藩・上杉家と雲井龍雄 …………… 以上 88 巻 4 号
- V 第一高等学校時代（大正 3～6 年：17～20 歳）
 - 1 高校 1 年（大正 3 年 9 月～4 年 7 月：17～18 歳）
 - 2 高校 2 年（大正 4 年 9 月～5 年 7 月：18～19 歳）
 - 3 高校 3 年（大正 5 年 9 月～6 年 7 月：19～20 歳）…………… 以上本号
- VI 東京帝国大学時代（大正 6～9 年：20～23 歳）…………… 以下次号
- VII エピローグ

V 第一高等学校時代（大正3～6年：17～20歳）

【211】 我妻は、第一高等学校（一高）に進学した米沢中学校の同級生・鈴木重助について「第2志望のフランス語クラスに入学した」と述べていた（【189】）。

高等学校の「部」および「類」の区分ならびに割り当てに関しては、明治42年4月21日文部省令第11号「高等学校大学予科入学者選抜試験規程」（大正3年4月30日文部省令第18号改正）⁽¹⁾ 5条・6条が、次のように規定していた。⁽²⁾

第5条 選抜試験ヲ受ケントスル者ハ其ノ入学後修業セントスル部類ヲ指定スヘシ

2 指定スヘキ部類ハ左ノ如シ

第一部甲類	{ 英語法科 政治科 経済科	第二部甲類	工科
第一部乙類		英語文科	第二部乙類
第一部丙類	{ 独語法科 独語文科	第二部丙類	農科
第一部丁類		{ 仏語文科 仏語法科	第三部

3 入学志願者ハ志望類2箇以上（同一部内ノ類ニ限ル）を併セ指定スルコトヲ得此ノ場合ニ於テハ其ノ志願類ノ順位ヲ定ムヘシ

第6条 選抜試験ヲ受ケタル者ハ之ヲ第一部、第二部及第三部ノ三部ニ分チ其ノ試験ノ成績順ニ依リ各高等学校ニ於テ各部募集ノ総員ト同数ノ人員ヲ選出シ其ノ内ニ就キ左ノ方法ニ依リ入学セシムヘシ

- 一 選抜試験成績順ニ依リ本人ノ指定スル第一ノ志望類ニ配当ス
- 二 第1号ノ場合ニ於テ成績相同シキトキハ抽籤ニ依ル
- 三 第1号第2号ニ依リ配当ノ結果本人ノ指定スル第一ノ志望類ニ満員ト

(1) この改正は、従来、第二部が甲類（工科）・乙類（理科・医科ノ内薬学科・農科）の2類であったのを、農科を丙類として独立させたものである。

(2) なお、同規程は、大正6年4月27日文部省令第4号「高等学校大学予科入学者選抜試験規程」で全改された後、大正8年3月29日文部省令第8号「高等学校規程」制定により廃止され、それまでの「部」「類」の区分は、同年4月19日文部省令第14号「官立高等学校高等科入学者選抜規程」5条で「文科（甲類・乙類・丙類）」「理科（甲類・乙類）」に変更された。「甲類」「乙類」「丙類」の区分は、第1外国語が英語・独語・仏語の違いである。

ナリ配当スルコトヲ得サル者ニ就キテハ更ニ成績順ニ依リ本人ノ指定スル
第二以下ノ志望類ニシテ缺員アルモノニ配当ス

四 第3号ノ場合ニ於テ成績相同シキトキハ志望類ノ順位ニ依ル

五 第3号ノ場合ニ於テ成績及志望類ノ順序相同シキトキハ抽籤ニ依ル

六 前数号ニ依リ配当ノ結果本人ノ指定スル志望類悉ク満員トナリタルトキ
ハ入学スルコトヲ得サルモノトス

2 前項ニ依リ配当ノ結果又ハ事故ノ為、入学者ニ缺員ヲ生シタルトキハ前項
選出人員以外ニ就キ更ニ前項ノ方法ニ依リ之ヲ補填スヘシ

この文部省令を受けて、第一高等学校規則「第三款 入学」は、上記「部」「類」
の区別と志望順位に関する規定を設置している（6条・8条。なお、7条は入学検定
料5円を定め、9条は入学科3円を定める⁽³⁾）。

【212】一方、我妻らが受験した大正3年入試に関しては、大正3年5月1日文部
省告示第91号「本年各高等学校ニ入学セシムヘキ生徒数及選抜試験ニ関スル事項」
で、以下のように定められた。

① 定員数——第一～第八の各高等学校の入学定員数は、【別表V-1】に掲記
した通りである。なお、第一部丁類（仏語クラス）は、一高と三高にしか設置され
ていない。また、二高と八高に関しては、第一部の英語クラス（甲類と乙類）全体
で定員が定められた。

② 試験科目——以下の4教科である。

Ⓐ 国語及び漢文（国文解釈・漢文解釈・書取・作文）

Ⓑ 外国語（解釈・国文英独仏訳・書取⁽⁴⁾）

Ⓒ 数学——第一部入学志望者：代数・幾何〔平面〕

第二部・第三部入学志望者：代数・幾何〔平面・立体〕・三角法

Ⓓ 第一部入学希望者：歴史及び地理

第二部・第三部入学希望者：化学

(3) 『第一高等学校一覧（自大正3年至大正4年）』（第一高等学校、大正3年）58-60頁、『同（自
大正3年至大正4年）』（大正4年）59-60頁。

(4) 外国語は、基本的には英語であり、ただし、一高に関してのみ、第一部丁類志望者につき仏
語、第一部丙類および第三部志望者につき独語での受験が認められた。

③ 試験期間——明治41年の入試改革で、それまでの総合共通選抜制⁽⁵⁾は、各高等学校別入試制に改められたが、入試の日程に関しては、一時期七高造士館が別日程で実施したのを除けば、すべてのナンバースクールで統一され、その結果、高等学校の掛け持ち受験は物理的に不可能であった。

大正3年入試の出願期間は6月1日～15日⁽⁷⁾。試験期間は7月11日～14日の4日間で、第1日(11日・土)が上記①国語・漢文、第2日(12日・日)が②数学、第3日(13日・月)が③外国語、第4日(14日・火)が④文系は歴史・地理、理系は化学である。なお、一高では、従来は学科試験終了後に体格検査を行っていたが、我妻らが受験した大正3年より学科試験開始前の7月8日～10日実施に変更されている⁽⁸⁾。

【213】 試験問題は、我妻らが受験した時代は、第一～第八のナンバースクール共通である。以下では、我妻が苦手科目と述べる、英語の問題を転記しておこう⁽⁹⁾。

(5) 明治35年4月25日文部省告示第82号「高等学校予科入学試験規程」(→明治36年4月21日文部省告示第84号で全改)では、「部」「類」のみならず、入学を希望する「高等学校」に関しても、成績順で割り当てる制度が採用されていた(同明治35年告示16条→明治36年告示6条)。

(6) 前掲注(5) 明治36年文部省告示第84号は、明治41年3月12日文部省告示第78号によって廃止され、明治35年以前の各高等学校別に合格者を判定する制度に復帰するものとされ(明治41年4月18日文部省告示第148号「本年各高等学校ニ入学セシムヘキ生徒ノ数及選抜試験ニ関スル事項」)、そして、この年度限りの暫定措置が、翌明治42年4月21日文部省令第11号「高等学校大学予科入学者選抜試験規程」(【212】)によって制度化されたものである。

さらに、その後についても触れておくと、大正6年改正(大正6年4月27日文部省令第4号)は、総合共通選抜制を復活させたが、翌大正7年12月6日勅令第389号「高等学校令」(第2次高等学校令)による学制改革(前掲Ⅳ注(61)参照)を受けて、大正8年4月19日文部省令第14号「官立高等学校高等科試験入学者選抜規程」(前掲注(2)参照)4条・5条は、再び各高等学校別の合格者判定に復帰した。

だが、大正8年文部省令第14号は、大正14年11月25日文部省令第42号によって改正され、全国の官立高等学校を2班に分け、1校と他班に属する1校を併願し、同一受験会場で2種の入学試験を受け、成績順に志望校に配当する制度(入試二班制)が採用された。

この制度は2年限りで廃止され、昭和3年入試より、大正8年の学校別入試制度に復帰するが、ただし、試験科目ならびに試験問題に関しては、明治35年以後の共通制が廃されて、高等学校がそれぞれ試験科目を設定し、試験問題を作成するようになった(学校別入試問題制)。

以上につき、笈田知義①『旧制高等学校教育の成立』(ミネルヴァ書房、昭和50年)190頁、同②『旧制高等学校教育の展開』(ミネルヴァ書房、昭和57年)1頁、旧制高等学校資料保存会(編著)『資料集成・旧制高等学校全書(第3巻・教育編)』(昭和出版、昭和56年)560頁、562頁、563頁、564頁、571頁。

(7) 東京朝日新聞大正3年4月30日朝刊4面「高等学校長会議／試験科目及期日決定」。

(8) 東京朝日新聞大正3年5月2日朝刊4面「高等学校入学試験改正」。

(9) 受験準備研究会(編)『(自明治42年至大正7年)最近十ヶ年間高等学校入学試験問題集』(若林春和堂、大正8年)50頁、山本光康(編纂)『最近拾ヶ年(大正元年より大正拾年まで)高等学校入学試験問題答案詳解』(金刺芳流堂、大正11年)81頁。

〔別表V-1〕 大正3年各高等学校の定員・志願者数・入学者数・合格率

		一高	二高	三高	四高	五高	六高	七高 造士館	八高	合計		
第一部	定員	甲類	80	40	40	80	80	40	40	40	665	
		乙類	40	40	40	35	35	40	35	40		
		丙類	40	40	40	40	40	40	40	40		
		丁類	40		35							
		合計	200	80	155	155	155	120	115	80		1,060
	志願者	959 (3)	308 (2)	521 (1)	663 (2)	366 (2)	315 (1)	325 (2)	274 (0)	3,431 (13)		
	入学者	186 (3)	75 (2)	146 (1)	131 (2)	143 (2)	106 (1)	101 (2)	61 (0)	949 (13)		
	合格率	19.65%	24.84%	28.16%	20.00%	39.40%	33.83%	31.50%	22.26%	27.93%		
	第二部	定員	甲類	68	40	80	40	80	40	40	80	468
			乙類	10	30	19	15	15	19	19	19	146
丙類			20	40	21	20	20	21	21	21	184	
合計			98	110	120	75	115	80	80	120	798	
志願者		741 (2)	499 (2)	532 (4)	241 (2)	437 (3)	217 (3)	397 (1)	460 (4)	3,534 (21)		
入学者		89 (2)	108 (2)	103 (4)	65 (2)	98 (3)	69 (3)	67 (1)	108 (4)	707 (21)		
合格率		12.25%	21.96%	19.96%	27.57%	22.95%	32.73%	17.09%	24.14%	20.48%		
第三部	定員	74	42	40	42	42	42	42	42	366		
	志願者	429 (0)	339 (0)	266 (0)	280 (0)	238 (0)	289 (0)	305 (1)	281 (0)	2,427 (1)		
	入学者	68 (0)	42 (0)	37 (0)	39 (0)	38 (0)	34 (0)	37 (1)	39 (0)	334 (1)		
	合格率	15.85%	12.39%	13.91%	13.93%	15.97%	11.76%	12.42%	13.88%	13.80%		
合計	定員	372	232	315	272	312	242	237	242	2,224		
	志願者	2,129 (5)	1,146 (4)	1,319 (5)	884 (4)	1,041 (5)	831 (4)	1,027 (4)	1,015 (4)	9,392 (35)		
	入学者	343 (5)	225 (4)	286 (5)	235 (4)	279 (5)	209 (4)	205 (4)	208 (4)	1,990 (35)		
	合格率	16.31%	19.91%	21.98%	26.91%	27.15%	25.51%	20.27%	20.80%	21.48%		

* 『日本帝国文部省年報・第42（自大正3年4月至大正4年3月）上巻』（文部大臣官房文書課、大正5年8月）129-133頁。

* （ ）の数字は「支那人」（支那政府委託生・特別予科課程を除く）。

● 英文解釈 (80点)

次ノ文章ヲ解釈スベシ

1. It is the opinion of all those who have paid any attention to the progress of the world that the Pacific Ocean will, at a not very distant date, become one of the principal theatres of commercial and political activity; in other words, that events in the Far East will become more and more matters of world-wide interest as time progresses.
2. Work, according to my feeling, is as necessary as eating and sleeping. Even those who do nothing which a reasonable man would call labour imagine themselves to be doing something, and there is no who would willingly be thought quite an idler in world.

● 和文英訳 (80点)

次ノ文章ヲ英語ニ翻訳スベシ

1. 不幸にも汽車に乗りおくれましたので今朝漸く当地に着きました。試験が済んだら早速郷里に帰り海浜に行って英語と数学とを出来るだけ勉強する積りです。
2. 此の上衣は僕には少し大き過ぎるが君にはよく合ふかも知れん。一寸着て見たまへ。

● 書取 (40点)

Geography is a description of towns, rivers, mountains and countries – the things which a traveller sees in going from one place to another. It may be compared to some roving fellow who has been all over the world in ships, cars, and steamboats, and has come back to give us an account of what he has seen.

【214】 一高の受験に関して、岸信介は、次のような文章を残している。⁽¹⁰⁾

7月中旬試験が始まった。私は6月頃から脚気の気味にて一時は受験を止めようかとも考えたことがあった。その頃兄〔佐藤市郎。【182】〕は海軍大学在学中で千駄ヶ谷の徳江という家に下宿していた。私も数回訪ねて行ったが、兄も私の下宿へ一度訪ねて来られ、脚気がひどいようなら試験を止めて帰国しろと言われたこともあった。

兎に角頑張って試験を終った。毎日難波正太郎〔東大在学中。【186】〕君に試験の様子を聞かれ、成績が良くないので大分ひどくやられた。「皆出来たと思っても田舎

(10) 岸信介・前掲Ⅲ注(133) ①『我が青春』124-125頁。なお、②『私の履歴書』44-45頁も参照。

者の出来たは当にならぬものだ。英語の訳など同じ出来ても田舎者の訳はなつて居らぬから、従つて自分でしくじつたと思うようではとても駄目だよ」と言われた。一寸癪にも障つたけれども一高首席入学の秀才の言うこと故一言もなかつた。

そんなことやら脚気もあるので試験が済むと翌日は匆々として帰国した。8月中旬成績発表とのことで〔正しくは7月29日。【216】〕入学が出来たら兄から通知して呉れることになっていた。処が何時までも兄から期待した電報が来ぬ。役場へ官報を見に行くのも気がひけて躊躇して居た。その中に倉橋〔亨〕君から便りがあつて、小田切〔豊秋〕君は英法へ、私は独法へ、倉橋君は仏法へそれぞれ入学出来たことを報じて来た。早速役場に官報を見に行きこの入学を確めた。続いて学校からも通知が来た。兄が通知を寄せさなかつたのは私の入学が一部丙とあり一部丙は仏法で私は第1志望の独法へ入学が出来なかつたものと思つたとのことであつた。その頃一部法文科の各組は甲英法、乙文科、丙独法、丁仏法であつたのである。

この文章からは、岸の第1志望が第一部丙類（独語）、第2志望が丁類（仏語）であつたことが知られる。我妻の米沢中学の同級生・鈴木重助も、丁類（仏語）が第2志望であつたことから、社会科学系の3類（甲類・丙類・丁類）のうち丁類（仏語）が一番入りやすかつた（＝今日的にいえば偏差値が低い）ことが分かるが、では、一番の入るのが難しいのは、甲類（英語・定員80名）と丙類（独語・定員40名）のどちらなのだろうか。

〔別表V-1〕で使用した『文部省年報』には、第一部内部の各類の志願者数・入学者数や、第1志望・第2志望の分布状況が掲載されていない。これらの情報が掲載されているのは、筆者の知る限りでは、文部省専門学校局『高等学校大学予科入学者選抜報告』巻末「附録」の「入学志望者并入学者ニ関スル統計表」であるが、しかし、誠に遺憾ながら、肝心要の我妻や岸の入学年（大正3年）に関する冊を入手することができなかつた（そもそも同年度に関しては、報告書が発刊されなかつたのかもしれない）。そこで、同年度を除く前後5年の数字を示すと、〔別表V-2〕のようになる。⁽¹¹⁾「入学者」欄中「*」を冠記した数字が第2志望者の数である。

(11) 『明治43年高等学校大学予科入学者選抜試験報告』（文部省専門学務局、明治44年）371頁「明治43年各高等学校入学志望者入学者学科別」、同『明治44年』（明治45年）249頁、同『明治45年』（大正2年）231頁、同『大正2年』（大正3年）243頁、同『大正4年』（大正5年）253頁。

〔別表V-2〕 第一高等学校第一部甲類・乙類・丙類・丁類1年在籍者の内訳

		明治43年	明治44年	明治45年	大正2年	大正3年	大正4年
甲類	定員	80	80	80	80	80	80
	志願者	548	493	535	502		592
	倍率	6.85倍	6.16倍	6.69倍	6.29倍		7.40倍
	入学者	76 *0	67 *4	69 *5	77 *1		76 *0
	合格率	13.87%	14.40%	13.83%	15.54%		12.84%
	留年者	2	2	2	1	1	2
	出身中学 東京：地方	35%：65%	45%：55%	31%：69%	43%：57%	37%：63%	41%：59%
乙類	定員	40	40	40	40	40	40
	志願者	116	101	99	86		83
	倍率	2.90倍	2.53倍	2.48倍	2.15倍		2.08倍
	入学者	21 *11	25 *14	19 *16	12 *23		12 *23
	合格率	28.45%	38.61%	35.35%	40.70%		42.17%
	留年者	11	4	9	3	4	5
	出身中学 東京：地方	39%：61%	43%：57%	36%：64%	37%：63%	51%：49%	49%：51%
丙類	定員	40	40	40	40	40	40
	志願者	218	282	291	234		200
	倍率	5.45倍	7.05倍	7.28倍	5.85倍		5.00倍
	入学者	38 *5	40 *0	38 *0	34 *0		35 *2
	合格率	19.72%	14.18%	13.06%	14.53%		18.50%
	留年者	1	3	5	5	4	1
	出身中学 東京：地方	59%：41%	52%：48%	34%：66%	48%：52%	31%：69%	59%：41%
丁類	定員	40	40	40	40	40	40
	志願者	102	108	145	115		125
	倍率	2.55倍	2.70倍	3.63倍	2.88倍		3.13倍
	入学者	13 *28	12 *29	11 *31	15 *22		11 *26
	合格率	40.20%	37.96%	28.97%	32.17%		29.60%
	留年者	3	4	2	1	2	3
	出身中学 東京：地方	39%：61%	43%：57%	44%：56%	51%：49%	42%：58%	44%：56%

第一部（文系）全4類の中で、志願倍率（競争率）が最も低いのは乙類（英文）であるが、しかし、丁類（仏法・仏文）については、入学者に占める第2志望者の数が、第1志望者の数を常に上回っていることから、岸信介や鈴木重助のように第1志望の「滑り止め」で志願する生徒が多かったのだろう。

一方、甲類（英法）と丙類（独法・独文）は、〔別表V-2〕の数字の限りでは実力伯仲のように見えるが、我妻は次のように述べている。⁽¹²⁾

大正3年、パスしまして第一高等学校に入ることができました。予備校で、田舎者を驚かせた利口な東京の中学校の卒業生が、どれだけ大学に入るだろうか。なかなか入る。私は独法でしたが、40人のうち10人ぐらいは東京の第一中学、第四中学、高等師範の附属中学というような最優秀の中学から入ります。ところが独法というのは、田舎くさいということになっていて、東京の気の利いた学生はあまり志望しないと見え、40人2クラスの英法を、半数位い連中で占めるのです。独法は30人の田舎から来た、蛮からな奴の力の方が強く、英法は東京の中学でのウエートが重くなり、気分は都会風になったようです。クラスの中の空気はまるで違う。

なお、我妻と同じ第一部丙類に33位で合格した東京の中学（東京高師附属中）出身の田代重徳は、第1志望が甲類（英法）で、丙類（独語）は第2志望であったから⁽¹³⁾、少なくとも我妻の学年に関していえば、丙類（〔別表V-3〕）33位以下の生徒の成績は、甲類の最下位より劣っていたことになる。

【215】 我妻が甲類ではなく丙類を受験した理由も、地方と東京の中学生の英語の実力差を感じたためのもので、彼は、次のようにも述べている。⁽¹⁴⁾

当時、田舎の中学校の生徒の一番力のないのは英語です。私は東京に出て、第一高等学校を受け、幸いにも1番で入ったのですがけれども、英語の力はクラスの中でずつと落ちていました。東京の中学校を卒業して来た者の英語の出来るのにはあきれかえった。とても私とは比較にならない。一所懸命やってもう追いつけこないと、あきらめたので英語は駄目でした。それで、私は第1外国語は独語でした。これはみんな初めからやるのですから、一所懸命やれば負けっこない。

(12) 我妻栄「地方の高校生への責任」前掲Ⅳ注（6）46-47頁……〔所収〕292頁。

(13) 田代秀徳「重兄の追憶（第一部）」『田代重徳追憶録』〔別表V-3〕㉓158頁。

(14) 我妻栄「父と子・子と父」前掲Ⅱ注（87）117頁……〔所収〕195頁。

〔別表V-3〕 大正3年：第一部1年四之組（丙類＝独法・政治・独文科）生徒一覧

	氏名	1→2→3年席次 大学1年席次	進路 著作・評伝
①	我妻栄 山形平 米沢中	→4→2→1 →東大法独2	東大教授（民法）
②	柴田健太郎 福岡士 修猷館中	→10→15→11 →東大法独7	司法官→弁護士 【著作】「改正民事訴訟法の準備手続に就て」司法研究報第5輯報告書集6（昭和2年）、成道齊次郎＝柴田健太郎（共編）『商法手形小切手法判例総覧（第1巻）（第2巻）』（帝国判例法規、昭和9年・昭和13年）、柴田健太郎＝加々見仲次郎（共編）『民事訴訟費用法〔民事訴訟〕用印紙法及登録税法印紙税判例訓令通牒回答決議協議学説類纂』（清水書店、昭和12年）、柴田健太郎＝加々見仲次郎『記録によるあらゆる民事訴訟の実際（第1編）（第2編）』（清水書店、昭和13年）
③	三輪寿壮 福岡平 修猷館中	→8→13→14 →東大法独40	弁護士・衆議院議員 【著作】「末弘巖太郎博士」解放5巻5号（大正12年）70頁など 【評伝】民主社会主義54＝55合併号（三輪寿壮追悼特別号、昭和32年）、三輪寿壮伝記刊行会（編集）『三輪寿壮の生涯』（三輪寿壮伝記刊行会、昭和41年）、三輪建二『祖父・三輪寿壮——大衆と歩んだ信念の政治家』（鳳書房、平成29年）
④	金田一他人 岩手平 盛岡中	→23→5→8 →東大法独× 1年次留年	（大正9年大学3年在学中に死去） 【著作・評伝】金田一他人『身も魂も』（我妻栄、大正10年。【1】）
⑤	関屋悌藏 長野士 東京一中	→2→18→15 →東大法独× 1年次留年	満鉄→満州国新京特別市副市長→駐華代理大使 【著作】『遼陽ヲ中心トスル南満地方事情』（出版者不明、昭和7年）
⑥	立石弘毅 長野 諏訪中	—	（一高1年修了時より名簿に記載なし） （不明）
⑦	嘉治隆一 兵庫平 神戸一中	→26→21→18 →東大法独46	満鉄→朝日新聞社→評論家 【著作】エドゥアルト・ベルンシュタイン（著）／嘉治隆一（訳）『修正派社会主義論（新人会叢書・第2編）』（聚英閣、大正9年）、「二つの死〔テオドル・シュテルンベルヒ〕」心3巻7号（昭和25年）67頁、『人物万華鏡』（朝日新聞社、昭和42年）、『人と心と旅——人物万華鏡・後篇』（朝日新聞社、昭和48年）、「田中先輩を憶う（田中耕太郎追悼）」心27巻5号（昭和49年）109頁など
⑧	平岡梓 兵庫平 私立開成	→3→16→22 →東大法独23	農商務省→日本瓦斯用木炭株式会社社長 【著作】『梓・三島由紀夫』（文芸春秋、昭和47年）、『梓・三島由紀夫（没後）』（文芸春秋、昭和49年） 【評伝】坂奈好也「水産庁高官列伝——水産の発展に貢献した人たち(35)平岡梓・三宅発士郎・笹山茂太郎——異色の歴代水産局長」水産週報1644号（平成16年）25頁

<p>⑨ 重松宣雄 鳥取士 東京一中</p>	<p>→12→37→32 →東大法経10</p>	<p>外交官（奉天領事→官房文書課長） 【著作】「対外貿易と在外同胞」海外移住11巻9号（昭和13年）1頁、「大東亜共栄圏の理念」日本南方協会（編）『資源開発と其経営南方事情』（教育研究会、昭和17年）81頁</p>
<p>⑩ 石井康 東京士 東京一中</p>	<p>→28→25→24 →東大法法独73</p>	<p>外交官（フィリピン特命全権公使）→弁護士 【著作】「アフガニスタン事情」外交時報47巻12号（565号、昭和3年）105頁、「日仏印共同防衛協定成立に際して」国際月報8号（昭和16年）1頁</p>
<p>⑪ 斉藤和三郎 群馬平 前橋中</p>	<p>→27→28→30 →東大法法独96</p>	<p>大蔵省→台湾総督府 【著作】（編）『誰にも判かる経済の知識』（聚文館、昭和4年）、峯栄＝斎藤和三郎＝武藤正三『土地測量法講義——附：土地異動申告申請の手續と現行地租法講義』（大日本土地測量法講習会、〔改訂増補第9版〕昭和10年）</p>
<p>⑫ 堀内守治郎 東京 東京一中</p>	<p>→×1年次留年</p>	<p>（大正8年一高3年在籍、大正9年より名簿に記載なし）（不明）</p>
<p>⑬ 赤司卓治 佐賀 佐賀中</p>	<p>→38→28→30 →京大法法</p>	<p>弁護士 【著作】「最後の晚餐 自由と正義8巻3号（昭和32年）17頁、「シューベルト会と首相」自由と正義9巻4号（昭和33年）38頁、八幡小次郎〔赤司卓治〕『明正会志——あるクラス会の話』（中央公論事業出版、昭和46年）、『随筆・ふるさと佐賀』（中央公論事業出版、昭和48年）</p>
<p>⑭ 大鐘義人 福島士 天王寺中</p>	<p>→15→17→×</p>	<p>（大正5年一高3年在籍中に死去） 【著作・評伝】『義人遺稿』（大鐘義人遺稿編集会・〔代表者〕長谷田泰三、大正6年）</p>
<p>⑮ 鈴木八郎 東京平 市立高千穂</p>	<p>→6→10→12 →東大法政47</p>	<p>第一銀行 【著作・評伝】『鈴木八郎遺稿並追悼録』（鈴木八郎遺稿並編集委員、昭和6年）</p>
<p>⑯ 成富信夫 佐賀士 和歌山中</p>	<p>→25→7→7 →東大法法独13</p>	<p>農商務省→弁護士 【著作】『権利の自壞による失効の原則』（有斐閣、昭和32年） 【評伝】『成富信夫の思い出』（成富信夫追悼録編集委員会、昭和58年）</p>
<p>⑰ 塚原（江原）三郎 栃木平 宇都宮中</p>	<p>→32→35→37 →東大法法独67</p>	<p>（大学2年次に「江原」に改姓） 弁護士・衆議院議員→栃木県教育長 【著作】「教育委員に就任して」教育月報9巻94号（栃木県教育委員会、昭和33年）4頁 【評伝】「（今月の人）県教育委員長江原三郎氏」教育月報11巻119号（栃木県教育委員会、昭和35年）2頁、「江原三郎先生（県教育委員長）逝去」教育月報17巻178号（栃木県教育委員会、昭和40年）19頁</p>
<p>⑱ 長谷川恭平 埼玉平 熊谷中</p>	<p>→13→32→21 →東大法経6</p>	<p>（不明：昭和18年4月2日死去？）</p>
<p>⑲ 清田岩夫 徳島士 今治中</p>	<p>→21→27→25 →東大法法独57</p>	<p>日本銀行→川北電気→日新電機 【評伝】「（時の人）日清電機（新）専務取締役・清田岩夫氏」経済市場11巻5号（昭和15年）51頁</p>

⑳	中島寅之助 福岡平 修猷館中	→37→38→36 →東大法律独167	鉄道省(鉄道調査部理事)→産業組合中央会 【著作】(編)『日本産業組合教育史』(産業組合中央会、昭和15年)、(編)『大東亜戦完遂に処し産業組合の採るべき方針——昭和17年産業組合活動方針』(産業組合中央会、昭和17年)、『産業組合綱要』(産業組合中央会、昭和17年)
㉑	相川淳三 山梨平 私立芝中	→31→36→28 →東大法律独× 1年次留年	司法官(東京少年審判所審判官) 【著作】「天鳥船——短歌」少年保護(司法保護協会)7巻3号(昭和17年)62頁、「ハルビンの母」昭徳(司法保護協会)8巻9号(昭和18年)61頁
㉒	大熊興吉 埼玉平 私立聖学院	→1→2→2 →東大法律独9	外交官(在支那国公使館三等書記官)
㉓	斎藤直一 山形平 東京高師附属	→5→6→6 →東大法律独28	司法官(大阪高裁長官)→弁護士 【著作】斎藤直一「思出と感想の若干——司法部在職40年を顧みて」判例時報244号(昭和36年)4頁、「(あの人この人訪問記:第130回~第132回)斎藤直一さん(上)(中)(下)」法曹251号(昭和46年)7頁、252号12頁、253号8頁
㉔	秋山雄一 長野平 野沢中	→24→22→19 →東大法律独30	大蔵省
㉕	歌田千勝 山梨平 松本中	→19→14→13 →東大法律独61	(大正2年乙類入学→大正3年丙類1年転科) 内務省→厚生事務官 【著作】「御警衛の蔭にひそむ警察美談」警察協会雑誌420号(昭和10年)49頁、「紀元二千六百年を迎える覚悟」紀元二千六百年1巻6号(昭和13年)8頁、「紀元二千六百年を迎えて」社会教育11巻1号(125号、昭和15年)25頁
㉖	尾形鏡亮 群馬士 太田中	→17→12→10 →東大法律独42	横浜正金銀行(神戸支店支配人代理→奉天支店副支配人)
㉗	長崎惣之助 秋田平 秋田中	→34→31→26 →東大法律独65	鉄道省→国鉄総裁 【著作】『鉄輪の轟くところ』(交通研究所、昭和18年)、『心のかて』(交通公論社、昭和31年)
㉘	田原内蔵太郎 和歌山平 新宮中	→9→26→20 →東大法律独52	弁護士
㉙	内山貞三郎 新潟平 柏崎中	→14→9→文科3 →東大文学科	三高教授→阪大教授(ドイツ演劇史) 【評伝】「内山貞三郎教授略歴および著作目録」独逸文学(関西大学)12号(昭和42年)213頁、内山貞三郎博士喜寿祝賀出版会(編)『回顧』(関西大学文学部独文合同研究室、昭和48年)
㉚	伊藤武雄 愛知平 愛知四中	→33→34→35 →東大法律政78	(大正2年丙類入学→1年次留年) 満鉄→日中友好協会副会長 【著作】『黄龍と東風』(国際日本協会、昭和39年)、『満鉄に生きて』(勤草書房、昭和39年……〔新装版〕昭和57年)、伊藤武雄=岡崎嘉平太=松本重治(述)・阪谷芳直=戴国輝(編)『われらの生涯のなかの中国——六十年の回顧』(みすず書房、昭和58年)

			【評伝】伊藤武雄（報告）・石堂清倫ほか（質問）「満鉄調査関係者に聞く26調査課時代——大正期〔含：伊藤武雄氏略歴・主要著作（満鉄関係）〕」アジア経済29巻6号（昭和43年）68頁、伊藤武雄（報告）・山本秀夫ほか（質問）「満鉄調査関係者に聞く23満鉄の初期調査活動——石川鉄雄と野中時雄〔含：伊藤武雄氏略歴・主要著作（満鉄時代）〕」アジア経済29巻3号（昭和63年）63頁
③①	岸信介 山口士 山口中	→7→3→3 →東大法法独1	農商務省→総理大臣
③②	松本三千雄 東京士 東京四中	→22→4→5 →東大法法独87	住友銀行（筆頭取締役）→山之内製薬（顧問→相談役）
③③	田代重徳 東京士 東京高師附属	→11→11→9 →東大法法独45	外交官（広東公使）→講道館国際部長 【著作】『思い出つるまゝ』（田代重徳、昭和10年）、「日本ヲ中心トセル最近ノ国際事情」日本中等教育教学会雑誌19巻5号（昭和12年）291頁、「時局と国際宣伝」（外務省情報部、昭和12年）、「柔道使節のたび——30年振のヨーロッパ」世界週報36巻32号（昭和30年）22頁 【伝記】田代秀徳（編）『田代重徳追憶録』（東海大学出版会、昭和46年）
③④	森喬 千葉平 東京四中	→16→8→4 →東大法法独6	（大正2年丙類入学→1年次留年） 外交官（ハンガリー公使） 【著作】「現時の外交問題と国民の立場」外交時報47巻4号（557号、昭和3年）24頁、「国民政府と建国方略の实行」外交時報48巻12号（577号、昭和3年）83頁、「支那の国軍編遣会議」国際知識9巻4号（昭和4年）44頁、「国民政府の鉄道建設計画」外交時報51巻2号（591号、昭和4年）122頁、「国民組織とジャーナリズム」教育10巻5号（昭和17年）19頁
③⑤	高原弘 福岡平 修猷館中	→29→19→29 →東大法法独× 1年次留年	（大正2年丙類入学→1年次留年） （不明） 【著作】高原弘（作詞）・上田豊（作曲）「凶南の翼千里」（大正6年第27回一高記念祭東寮寮歌）
③⑥	浅野英明 愛媛士 松山中	→35→29→34 →東大法法独191	（明治45年乙類入学→大正2年丙類1年転科→1年次留年） 司法官（鳥取地家裁所長→高松地裁所長） 【著作】「法の社会医学的研究」司法研究第5輯報告書集5（昭和2年）
③⑦	神田襄太郎 兵庫平 神戸二中	→18→32→17 →東大法法独41	外交官（キューバ大使） 【著作】『為替相場と安定策』（東京宝文館、大正14年）、神田襄太郎＝大鷹正次郎『ライン川をめぐる国国（世界の国国8）』（国民図書刊行会、昭和28年）
③⑧	安孫子理兵衛 山形平 山形中	→30→30→27 →東大法政85	弁護士 【評伝】安孫子理兵衛思い出刊行会（編）『安孫子理兵衛思い出』（樋口朔三、昭和46年）
③⑨	成田広美 福井 福井中	→20→24→23 →（進学先不明）	（不明）

【216】合格発表日は7月29日⁽¹⁵⁾。なお、「官報」掲載の合格者氏名は「いろは」順なので、『第一高等学校一覧（自大正3年至大正4年）』『生徒氏名（大正3年9月末調）』第一部1年四之組（=丙類⁽¹⁶⁾）の記載順で在籍者の氏名（計39名）を挙示すると、【別表V-3】のようになる。この順番は、基本的には入学試験の成績順であるが、ただし、転科ならびに留年（休学および落第）組（計5名⁽¹⁷⁾）の掲載位置については、理由を調べ切れていない。

【217】長谷部茂吉によれば、「我妻先生は一高受験後自分の成績を自ら採点し、ある時はどうやらはいれたと安堵し、ある時は駄目だと落胆されていたが、発表の結果を見ると1番ではいっていたという逸話をきいた⁽¹⁸⁾」。

一方、高橋与市はいう。「中学校に於いては、常に学級の首席を占め、他の追従をゆるさず、終始特待生として取扱われた。又中学校を卒業するや、当時最も難関とされていた第一高等学校を受験、あっぱれ最高点の成績で入学した。当時吾々同輩の者が愛読していた雑誌『受験世界』のトップ記事に写真入りで発表された。吾々はこの時、流石我妻氏だ、と羨しくも、誇りをもって叫び讃えたのだ⁽¹⁹⁾」。

「受験世界」は、博文館「中学世界⁽²⁰⁾」の記者をしていた岡本学⁽²¹⁾が大正2年5月に創刊した雑誌で、その後、出版元（経営）は岡本から離れたようであるが、バック

(15) 官報599号（大正3年7月29日）779頁。

(16) 第一部「一之組」「二之組」は甲類（英法科。定員80名）を2クラスに分けたもの、「三之組」は乙類（英文科。定員40名）、「四之組」が丙類（独法・独文科。定員40名）で、「五之組」が丁類（仏法・仏文科。定員40名）である。

(17) ②歌田千勝は前年（大正2年）乙類の合格者で、丙類1年に転科した者、③伊藤武雄・④森番・⑤高原弘の3名は前年（大正2年）丙類合格の1年次留年組、⑥浅野英明は前々年（明治45年）乙類の合格者で、前年（大正2年）丙類1年に転科し、さらに1年次を留年した者である。

(18) 長谷部茂吉「孫田先生と私の学生時代」孫田秀春先生米寿祝賀記念論集『経営と労働の法理』前掲Ⅱ注（120）441頁。

(19) 高橋与市「雨声会」『追想の我妻栄——険しく遠い道』前掲Ⅰ注（63）26頁。

(20) 明治31年創刊の「中学世界」は、読者である中学生の投稿が人気を呼び、投稿の処理のために明治39年に創刊されたのが「文章世界」であった（【196】①）。一方、「文章世界」分離後の「中学世界」は次第に受験雑誌の色彩を強め、誌面も学校案内記や名士の学校時代の回想記が増え始める（日本近代文学館（編）『日本近代文学大事典（第5巻）』（講談社、昭和53年）267頁）。このノウハウを利用して、受験生に特化した誌面作りを行ったのが「受験世界」であった。

(21) 明治20年岡山県上道郡西大寺村（現：岡山市東区）に生まれる。大成中学校（現：大成高等学校）中退、博聞社「中学世界」訪問記者時代の著書として、岡本学『就学便覧』（文成社、明治43年）がある。彼の半生については、自伝『死獄』（日の出書房、大正9年）に詳しい。

(22) 読売新聞大正2年4月18日朝刊5面「（よみうり抄）新雑誌『受験世界』」、東京朝日新聞大正2年6月11日朝刊6面「（雑誌界）受験世界第1巻第1号」。

ナンバーを揃えている図書館が見当たらないため、詳細は不明である。⁽²³⁾

ただし、大正5年刊行の書籍——受験世界社編集部『最近優等入学者勉強法』には、大正2年度から大正5年度までの一高首席入学者の合格体験記が収録されており、これは雑誌「受験世界」記事の書籍化と推測されるところ、大正3年度の項には、①第一部甲類・吉田秀穂、②第一部丙類・我妻栄、③第二部甲類・馬場敬治、④第二部乙類・渡辺秀雄、⑤第二部丙類・大町文衛、⑥第三部・藤田秋治の合格体験談が掲載されている。⁽²⁴⁾

問題は、同じ第一部でも①甲類首席の吉田秀穂（外交官・吉田作弥の長男、開成中学卒）と、②丙類首席の我妻栄の優劣であるが、洗練された都会っ子の吉田とは対照的に、我妻の合格体験記は、地方出身者らしい純朴さがにじみ出ている。⁽²⁵⁾

一、志望確立の動機及び経路。別段動機だの経路だのと申す程の事はありませんでした。識らず識らずの間に決めて仕舞った迄の事です。これは兄〔義兄：孫田秀春〕が矢張り一高の独法出身であるのに影響されたのかも知れません。いろんな事を聞かされますと、自然そっちへ向いて来るものと見えます。

二、中学時代の勉強法は極めて平凡で、毎日習った事を理解して置いたゞけで、試験前になって、急激な勉強をして胡麻化したこともあります。

受験の為に特別に勉強を始めたのは五年の二学期末からです。物理化学や立体幾何三角等を比較的等閑に附して、英語及び西洋史に全力を注ぎました。これは田舎は英語は劣っていると思ひ、又一部は入学しても西洋史が必要だと思ったからです。要するに中学時代は何等の特別な事もなくして卒業したのです。

(23) 筆者の知る限りでは、山形県立博物館が、大正4年5月25日発行の3巻2号（岡本学・受験世界社）を所蔵するのみであるが、現物は実見していない。

(24) 受験世界社編集部『最近優等入学者勉強法』（尚栄堂、大正5年）①56頁、②61頁、③64頁、④69頁、⑤80頁、⑥81頁。⑦第一部乙類・⑧丁類の首席合格者の記事はないが、中学世界18巻4号（大正4年3月）「第一高等学校／首席合格者曰く」に、⑦の首席合格者・内田貢、⑧の首席合格者・山内直元（【188】）の合格体験記が掲載されている（⑦148頁、⑧152頁）。

なお、『最近優等入学者勉強法』大正4年度の項には、第一部甲類首席合格者である田中誠二の合格体験談も掲載されている（20頁）。

(25) 吉田の合格体験談は、「試験場に入って所定の席に就き、振鈴と共に問題が渡されました、鬼が出るか蛇が出るか、胸躍らせて披いて見るとこれは意外、何だ聞く程のことも無い。……英語、解釈は慣れて居る、和文英訳で少し考へたが30分程で答案が出来てしまひ、時計を眺みながら書取を待って居ると、漸く1時間ばかりでやって来た。書取はお手のもの……」と、小憎らしいほどである。

三、一高を選んだ理由と申しまして簡単なものです。人がよく一高出身者が什麼しても大学で良成績を獲ると申しますし、又性来の野心も地方の高等学校では満足する事が出来ず、向陵の健児に憧れて柏陽の木陰を慕った訳です。

四、地方の中学はどうも英語等で劣ってるだらうと思ひますし、又東京の中学の卒業生がどの位な学力を有するかを知る必要もあると思ひまして、卒業後直ちに上京し、一高の附近に寄宿して、開成の予備校に通ひました。他の学科は兎に角和文英訳に於て大いに得るところがあった様です。開成は僅か四十人位の少数が一室で習ふので、非常に心が落ちついてよかったです。

五、試験中の感想。一日目の国漢文の中、国語はさまで難解とは思ひませんでしたけれども二三ヶ所不十分な点があったと思ひます。漢文は昨年より遙に難かしい様でした。一番目の訓点などは、出来たやら間違つたやら未だにわかりません。書取は殆んど皆書けた様でした。二日目の数学は無難でした。

三日目の英語は大敵と思つて居りましたが、果して和文英訳の二番などは思はしくなかつた様です。最後の暗記物〔＝最終日の歴史・地理〕は大なる間違もなかつた様です。氏族制度や、外国貿易等特に注意して置いた事が出た等は、確に幸運だったとは云はねばなりません。四日通じて総点の七分は獲た事と思ひましたが、それでも不安心でたまらず、発表の日を待つて居つたのでした。

六、参考書は英語では南日氏の英文解釈法⁽³⁶⁾を一通り見ましたが、これは熟語等の次第に少くなる今日の受験界に於ては、あまり必要はないかと思ひます。和文英訳は中学ではあまりやりませんでしたので南日氏の和文英訳法⁽³⁷⁾を見ました。これは非常に得る所があった様です。しかしそれも辛うじて一回繰り返したゞけです。数学は参考書は何も見ません。たゞXY社の最近三十年間試験問題集⁽³⁸⁾を一通りやつたゞけです。国漢文の方では、徒然草を四分の一程みたゞけで、他は教科書を少し見たゞけです。要す

(26) 〔七戸注〕南日恒太郎（著）・神田乃武（閲）『英文解釈法』（有朋堂、初版：明治38年）。

(27) 〔七戸注〕南日恒太郎（著）・神田乃武（閲）『英文和訳法』（有朋堂、初版・明治40年）。同書に関しては、岸信介も受験勉強で使用していた。【185】。

(28) 〔七戸注〕「XY社」は、数学教育者・長沢亀之助（1861-1927）主幹の雑誌「えっくす、わい（The X, Y）」（明治39年1月創刊）の発行元。長沢亀之助は、福岡県久留米出身、明治11年長崎師範学校卒業、東洋英和女学校校長も務めた人。我妻にいう「最近三十年間試験問題集」は確認できなかったが、東京朝日新聞大正元年11月15日朝刊1面に「えっくす、わい増刊『最近十五年間官立学校入学試験問題号』（東海堂、大正元年）」の広告が掲載されている。

るに参考書参考書と云っても、僅か三ヶ月間に何程の事も出来ませんから、それより寧ろ中学の教科書を充分勉強した方が、遙に好結果を取めらるゝと思ひます。又中学平素の生徒の学力は、田舎も都会も平均して、そう大なる径庭がないと思ひます。たゞ三ヶ月間の勉強家が勝利を得る事となると思ひます。

そして、この一高受験のための試験勉強の方法が、我妻の「一生を通じての勉強の方針」と⁽²⁹⁾なった。

[218] 一方、中学時代は「チャッカリ秀才」であった自分の性格について、我妻は次のように述べている。⁽³⁰⁾

私の中学時代のチャッカリさを改めさせる非常に大きな転機があった。それは、第一高等学校の全寮制度で、みんなが一緒に勉強していた3年間です。

私のクラスは、40人のドイツ語のクラスだったが、その中の半分は地方の中学校の1番です。1番でない者でも3番以内です。東京の中学は別です。それが10人ぐらいずつ一つの部屋に入り、寝起きするのも、勉強するのも一緒です。

その頃ですから、成績を順番に発表するわけですが、成績の上がった奴が金を出して、みんなでコンパをやりました。そんな風にのんきだった。しかし、私は勉強する習慣がついていたので、欠席もしないでノートを取り、もし欠席したら友人のノートを借りて写していたから、私のノートは完全だったわけです。クラスの中に、私のノートで勉強して卒業した人もいました。自分は全然ノートをとらないで寝ていて、私が勉強がすんでから起こさせて、私のノートで勉強するわけです。

中学時代の私だったら、ノートを貸すのがいやだ、そんな暇がないといったかも知れません。しかし、高校生活の3年間は、私のそんな性格を改めさせた。みんなのた

(29) 我妻栄「試験勉強の話」前掲Ⅳ注(68)〔所収〕①227頁、②228-229頁「私は、入学試験勉強としては、中学の3年からの教科書を全部極めて詳細・正確に復習することをその中心とした。受験のための参考書は、その時分にも、むろん沢山あったが、私は一切見なかった。狭く深く、徹底的に理解する。これが私の一生を通じての勉強方針といってもよいかもしれない」。

我妻栄「地方の高校生の責任」前掲Ⅲ注(7)46頁……〔所収〕292頁「私も、我が道を進むというわけで、入学試験の勉強としては、中学3年からの教科書を全部究めて、詳細正確に復習することにしました。これは偽りのない本当の事です。受験のための参考書は、多少は見ましたけれども、二の次として、5年までの教科書を徹底的にやり直すという仕事を3ヶ月でやりました。深く狭く、狭く深く徹底的に理解する。これは私の一生を通じての勉強の方針といってもよいかも知れない」。

(30) 我妻栄「日本人は今世界中から憎まれている」前掲Ⅳ注(1)11-12頁……〔所収〕325-326頁。

めにやろう。みんなで一緒に勉強しよう。「よかろう。それでは今日は早く終わってやるから」とさえいった覚えがあります。

それから、「試験に出そうなところ、お前、ヤマかけておけよ」というからよかろうと自分で勉強しながら、あっちこちに印をつけて、後から起きてきて私のノートを勉強する人のために準備をしたこともあります。高校生活3年間で私の性格は相当変わった。チャッカリ根性がとれたんだろうと自分では考えております。

一高時代のどのような体験が、我妻の「チャッカリ秀才」の性格を改めさせたのだろうか。以下、彼の高校生活を、学年を追って見てゆくことにしよう。

1 高校1年（大正3年9月～4年7月：17～18歳）

このうち我妻の高校1年時代については、何よりもまず資料面に関して、あらかじめ片づけておかなければならない問題がある。

（1）弥生ヶ岡草人『向陵生活』

【219】それは、我妻が1年から2年に進級する大正4年7月に刊行された弥生ヶ岡草人『向陵生活』という書籍の件である。⁽³¹⁾

この書籍は、我妻が入学した大正3年9月から1年間の「寮生日誌の抜書をしたやうなもの」（「序」5頁）で、その後数多くの模倣企画が刊行されることとなった。大正6年7月刊行の野尻草雄『一高ロマンス』⁽³²⁾もその一つであり、著者「野尻草雄」の本名は野尻清彦（我妻の1学年下、高橋恒次郎・鈴木重助と仏語クラスで同級。【188】）——後の大仏次郎である。

同書は、野尻（大仏）が「中学時代」19巻11号（大正5年9月1日通常号）～20巻5号（大正6年4月1日通常号）に連載した記事に書き下ろしを加えて書籍化したものであるが、福島行一は、同書巻末「附録」に収録されている「新入生から見た一高の便所」（222頁以下）⁽³³⁾について、次のように推測している。

大正5年2月号の「中学世界」〔19巻2号〕に発表された「黄金文学 一高便所の

(31) 弥生ヶ岡草人『向陵生活』（牧民社、大正4年7月）。

(32) 野尻草雄『一高ロマンス（学生生活叢書・第1編）』（東亜堂書房、大正6年7月……〔復刻版〕大仏出版、昭和54年）。

(33) 福島行一「（解説）『一高ロマンス』について」野尻草雄『一高ロマンス（復刻版）』前掲注（32）葉13-14頁。

楽書」は、後に「一高ロマンス」収録の際「新入生の見た一高の便所」と改題された作品である。作者名は目次にはなく、本文の方に弥生ヶ岡草人とある。この作者名については、簡単な注記が必要である。大正4年7月、牧民社から「向陵生活」という本が出版された。作者名は弥生ヶ岡草人。よく売れたとみえて、4版からは修訂増補のうえ、彩虹社書房に発行所を移して、同じ「中学世界」2月号〔＝「黄金文学」掲載の19巻2号〕に広告が出ている。私は初め両作が同姓で発表されているのに迷い、間接的に大仏先生に伺ってみた。その結果、関係のないことがわかったが、想像するに「向陵生活」の人氣が、竹貫〔佳水。野尻清彦（草雄。大仏次郎）と旧知の博文館「中学世界」主筆〕の編集者意識を刺激し、結果として「一高ロマンス」の掲載を導いたようにも考えられる。

なお「黄金文学」後半が3月号〔19巻4号〕に続載されているが、このときの作者名は、目次が楽書通信、本文では弥生ヶ岡草人となっている。目次と本文との題名、作者名が違っている例は当時珍しいことではなかった。草雄の筆名は、9月号〔19巻11号〕の「初めてストームに襲はれた記」〔目次の記載は「ストーム襲来記……一高北寮 草雄」〕で使われたのが最初である。

【220】 大仏次郎は、我妻栄と同年（昭和39年）の文化勲章受賞者であるが、我妻と一高第一部丙類（四之組）で同級の嘉治隆一（〔別表V-3〕⑦）は、次のような文章を残している⁽³⁵⁾。

半世紀も前の同じころ、向陵生活をしていた野尻清彦（大仏次郎）、我妻栄の両君が、この〔昭和39年〕秋、くつわを並べて文化勲章をうけた。仕事を顧みて、我々までがほのぼのとした気持ちにさせられる。両君とも寮の狭い中庭でゴムマリ野球を楽しんでいた姿なども眼に浮かぶ。それに二人とも不思議にも、在校中に本を出したのを憶えて

(34) 昭和39年の文化勲章受賞者は、大仏次郎・我妻栄のほか、茅誠司（物理学）・藪田貞治郎（農芸化学）・吉田五十八（建築）の計5名である。

なお、この年度の文化勲章受章候補者選考委員会の委員であった中川善之助によれば、「最初には我妻君の名が出ていなかったことだけは確かである。それが誰から、どうした形で取上げられるようになったかは覚えていない。多分文部省側から私に耳打ちして、我妻栄先生はどうでしょうといいだしたような気がする。しかし他の委員も、私と我妻君の交友関係はみんな知っているらしいので、私は却ってそこに引掛ってしまって、自由な我妻援護論を大いに打つことができなかつたように記憶する」。中川善之助「理性院本覚栄法居士」『追想の我妻栄——険しく遠い道』前掲I注（63）58-59頁。

(35) 嘉治隆一『人と心と旅』（朝日新聞社、昭和48年）256頁。なお、49頁も参照。

いる。一方が「一高ローマンス」、他方が「向陵生活」というタイトルのものであった。

野尻草雄（大仏次郎）『一高ロマンス』に影響を与えた『向陵生活』の著者「弥生ヶ岡草人」の正体は我妻栄であったとする同級生の証言であるが、しかし、これを裏づける証拠資料を、他に見出すことができない。

（２） １年１学期（大正３年９月１１日～１２月２４日）

【221】『向陵生活』の主人公・弥生ヶ岡草人が、一高から入学許可と出頭通知を受けたのは８月上旬、入学許可日は新学年の開始日である９月１１日（金）、出頭日時は翌１２日（土）午前８時である。⁽³⁶⁾

弥生ヶ岡草人が郷里から上京して麴町の従兄の許に身を寄せるのは９月６日（日）、翌７日（月）学校に行つて寮の部屋割りの掲示を確認し、東寮１番室の自分の机を決めて名前を書いた紙を貼る。⁽³⁷⁾

ア 入学

（ア） ９月１０日（木）——寄宿舎入寮

【222】弥生ヶ岡草人が従兄の許から寮に入るのは、寄宿舎の開寮日（新学年開始日の前日）である９月１０日（木）。我妻の入寮も同日のことと思われるが、部屋は東寮１番室ではなく、東寮１５番室で、『寄宿寮生名簿』によれば同室者は〔別表V-4〕の通りである。⁽³⁸⁾

ただし、実際の同室者は、名簿と異なる可能性がある。というのも、北寮１０番室に入った岸信介は、同室者について次のように記述しているところ——、⁽³⁹⁾

同室者は、黒田鴻五（英法、大学卒業後農商務省、商工省とずっと勤務を同じくした。先年肺炎で急逝した）、鈴木勇君（英法、永らく肺を病み大学卒業後間もなく死亡）、杉本勝次（英法、現福岡県知事）、久慈学（仏法、内務省関係に勤務）、神田襄太郎（仏法、後独法に転科、大学卒業後外交官となる）、中田巖（文科、中途退学）、

(36) 『第一高等学校一覧（自大正３年至大正４年）』前掲注（３）１頁、55頁。

(37) 弥生ヶ岡草人『向陵生活』前掲注（31）４頁。

(38) 弥生ヶ岡草人『向陵生活』前掲注（31）８-19頁。

(39) 『大正３年第一高等学校寄宿寮生名簿』（奥付等なし、出版者・出版年不明）18-19頁。

(40) 岸信介・前掲Ⅲ注（133）①『我が青春』125-126頁、②『私の履歴書』45頁。

(41) 〔七戸注〕盛岡中学で金田一人・宮沢賢治の同級生。【185】①。

(42) 〔七戸注〕『第一高等学校一覧（自大正３年至大正４年）』の「生徒姓名（大正３年９月末調）」では、すでに四之組（丙類）に名前がある。〔別表V-3〕㉞。

宮嶋資夫（文科）、渡辺寧（工科、工博、東北大学教授）、坂上恒次郎（工科、大学卒業後富士紡入社）、森田澄一（医科、医博、日立病院長）、川瀬潔（医科、医博、松本病院長、後に東京に開業）、川井一（医科、医博、栃木烏山病院長）及私の13人であった。

——これに対して、『寄宿寮生名簿』記載の室生は総数12人で、宮嶋資夫・川瀬潔の名が認められない一方、井上貞蔵の名が記載されている。

我妻自身は（少なくとも実名では）寮の部屋について記した文章を残していないので、同じ東寮に入った伊藤武雄（〔別表V-3〕⁽⁴³⁾ ③⁽⁴⁴⁾）の文章を引用しておこう。

入学当初の1年級の室わりは、一部二部三部からの混合グループが組みあって、寮生活が始められた。安孫子〔理兵衛。③〕の旧室（1年生時代の室を、かく呼んだ）がどこだったか知らないが〔東寮6番室〕、私は東寮14番という、食堂と便所に一ばん近い北側の室に組み入れられた。⁽⁴⁶⁾階下自修室、階上に寝室があった。その寝室たるや独得で、アチックに小さな窓からの明りはうす暗く、月光は、入っても日光はささない式だった。一段高く床があって、10枚ばかりの畳が一行に敷かれてあり、これが寝床である。その長い床に、みんな魚のように並んでねる装置になっていた。畳床より一段低い通路は、ストームのお通り道でもあった。寮の照明は、自家発電といえば、しゃれているが、旧式機関であり、石炭は節約されるので、燭光はにぶく、消灯時間（23時）は厳重に行われるので、消灯後の読書は「蠟燭」になる。この蠟燭のもとで、

なお、成富信夫「安孫子君の想い出」『安孫子理兵衛思い出』〔別表V-3〕③23頁によれば、安孫子理兵衛もまた「最初は仏法生だったが、第1志望が独法だったので、学期が始まって間もなくのこと、独法科へ変らないかという勧誘を受けたらしい」。誰の勧誘かは不明であるが、「その後間もなく彼は独法へ変って来た」。

(43) 宮嶋資夫の漢字は正しくは「宮島鋭夫」で（〔244〕、『寄宿寮生名簿』前掲注（39）106頁では「通学生（北10）」と記載されている。一方、川瀬潔の記載は、当初より「通学生」で部屋割りの記載もない（132頁）。

(44) 井上貞蔵（神奈川・東京第四検定・第一部三之組）の名は、『寄宿寮生名簿』前掲注（39）では、岸の北寮10番室（83頁）のほか、西寮1番室にも重複記載されている（26頁）。なお、『人間・岸信介——波乱の90年』前掲I注（104）24頁掲載の同室者の記念写真では、中田巖の姿がない一方、宮嶋資夫・川瀬潔・井上貞蔵の姿が認められる。

(45) 伊藤武雄「57年の歳月をたどって」『安孫子理兵衛思い出』〔別表V-3〕③178-179頁。

(46) 〔七戸注〕伊藤の部屋は、正しくは東寮17番。東西2つの旧寮（明治23年築、3階建）の偶数番室は南向きで環境が良いため上級生が使用しており、東寮14番には1学年上の同姓同名の「伊藤武雄」が入室している。なお、東西中3つの新寮（2階建）は明治33年築、明治37年築の新寮1棟は翌38年3月1日記念祭で日露戦役「乃木」将軍にちなんで「栄寮」と命名された。

〔別表V-4〕 大正3年：東寮第15番室同室者（14名。『寄宿寮生名簿』掲載順）

①	藤本直 (原) 愛知県豊橋市東八町132 (現) 東京都荏原郡大井町濱川1063 私立芝中学 第一部1年二之組	一高では英法だったが、大正6東京帝大(法・法・独法科)入学、大正9卒、昭和15京城帝国大学法学部教授。 【著作】ヘルマン・レーム／藤本直(訳)『国家学』(政治学普及会、大正12年)、アントン・メンガー／藤本直(訳)『民衆政策』(広文館、大正12年)、アントン・メンガー／藤本直(訳)『新道徳学』(広文館、大正12年)、クルト・シュテルンベルヒ／藤本直(訳)『政治学説史』(政治学普及会、大正14年)、アドルフ・カスパリー／藤本直(訳)『政治学説史大要』(刀江書院、昭和8年)、『断種法』(岩波書店・京城帝国大学法学会叢刊5、昭和16年)
②	木内四郎 長野県下水内郡常盤村 県立飯山中学 第一部1年二之組	明治29・7・3生、大正6東京帝大(法・法・英法科)入学、大正9卒、大蔵省入省、主計局決算局長、理財局国債課長、主計局長、専売局長官を経て、昭和12幣原喜重郎内閣で内閣副書記官長、昭和22参議院議員(民主党公認・長野選挙区選出)、昭和43第2次佐藤栄作内閣・昭和46第3次佐藤内閣の科学技術庁長官。昭和47・8・31没。 【著作】『財政経済の実情と国民の覚悟』(国民精神総動員中央連盟、昭和13年)、『財政経済の実情と銃後国民の覚悟』(帝国在郷軍人会本部、昭和14年)
③	名井清 (原) 山口県吉敷郡吉敷村 (現) 東京市牛込区二十騎町16 府立第四中学 第二部1年二之組	大正6東京帝大(工・採鉱学科)入学、大正9卒、三菱鉱業。 【著作】名井清(述)／石橋徹(述)『鉄量調査に於ける試料採取と品位の推定に就て』／別子鉱山新堅坑の開鑿に就て(日本鉱山協会・鉱山講話83冊、昭和17年) 【評伝】岩崎潔「故名井清君の霊を弔ふ」日本鉱業会誌58巻(691号、昭和17年)744頁
④	円地与四松 石川県能美郡安宅町ワ66 県立小松中学 第一部1年一之組	円地文子の夫。明治28・9・16石川県生まれ、大正6東京帝大(法・政)入学、大正9卒、東京日日新聞記者、ベルリン特派員としてツェッペリン飛行船を報道、昭和5上田萬年の娘・文子と結婚、戦後は東海大学教授、昭和47・11・26没。 【著作】『空の驚異ツェッペリン』(先進社、昭和4年)、『欧米の大学同窓会』(円地与四松、昭和39年)
⑤	太田忍 (原) 東京市下谷区御徒町3ノ35 (現) 東京市小石川区久堅町27 開成中学 第三部1年二之組	(大正4年一高一年次留年、大正6年9月2年生、大正7年より名簿に記載なし)
⑥	倉井敏磨 北海道札幌郡広島村 庁立札幌中学 第一部1年三之組	明治28・6・12倉井惠洞の長男に生まれる。大正6東京帝大文学部哲学科入学から経済学部商業学科に転じて大正10卒、日本勧業銀行入行、同行理事、昭和22貴族院勅撰議員、昭和25新潟鉄工所社長、昭和39会長、昭和57・2・2没。 【著作】「現在の金融市場に対する若干の不満」日産協月報6巻2号(昭和26年)24頁、「企業側より見たる金融市場の改善について」経済連合48号(昭和26年)40頁、「これからは機械工業時代」経済展望24巻4号(昭和27年)30頁、「経済の自立と堅実なる企業経営」日産協月報7巻6号(昭和27年)11頁、「私の経営方針」経営者7巻9号(昭和28年)40頁

⑦	谷本励三 (原) 香川県高松市浜ノ丁 (現) 兵庫県武庫郡精道村 京都府立第一中学 第一部1年五之組	(大正6 東京帝大(法・政)入学、大正7年1年次留年、大正8年より名簿に記載なし)
⑧	市河彦太郎 静岡県沼津町白銀町 県立沼津中学 第一部1年二之組	明治29沼津の大地主で豪商・市河家(市河彦三の子)に生まれる。大正6 東京帝大(法・政)入学、大正9卒、外務省入省、フィンランド公使館一等書記官等を経て、昭和15イラン駐割特命全權公使、昭和21・4・1没。 【著作】『小さき芽』(文武堂、大正6年)、『文化と外交』(岡倉書房、昭和14年)、『国際文化事業に就て』(日本旅行協会・教養叢書：第13輯、昭和15年)、『外交と生活』(人文書院、昭和15年)、市河彦太郎=市河かよ子『フィンランド雑記』(黄河書院、昭和15年) 【参考文献】和田業穂子「随筆『フィンランド雑記』から読み解く1930年代のアルヴァ・アールト——日本人外交官市河彦太郎・かよ子夫妻との交流を通じて」建築歴史・意匠2019年(令和元年)947頁
⑨	飯田三郎 東京市日本橋区本石町1ノ7 私立独逸協会 第三部1年一之組	大正6 東京帝大(医・医学科)入学、大正10卒。 【博士論文】「邦人頸部淋巴管系統に関する解剖学的研究」(東京帝大、昭和9年)……〔掲載〕解剖学雑誌7巻2号(昭和9年)111頁
⑩	東恒人 (原) 長崎県西彼杵郡三重村736 (現) 神戸市熊田町51 第一神戸中学 第二部1年三之組	明治28・6・16東夷五朗の長男に生まれる。大正6 東京帝大(理・化学科)入学、大正9卒、大正12理化学研究所・鈴木研究室に勤務、昭和20・4・29死去。 【著作】『生物理論化学』(金原商店、大正15年)、『有機合成・抽出法』(岩波書店、昭和11年)、『研究所風景』(誠文堂新光社・科学文化叢書10、昭和17年)、
⑪	我妻栄 山形県米沢市鉄砲屋町 県立米沢中学 第一部1年四之組	大正6 東京帝大(法・法・独法科)入学、大正9卒、東大教授。
⑫	藤波寿 埼玉県南埼玉郡川柳村大字南青柳 県立粕壁中学 第三部1年二之組	大正6・7 東京帝大(医・医学科)入学、大正10・7卒、東京帝大駒込病院入沢達吉内科に入局、入沢内科の俊英と称されるが、大正14父・孝(草加市医師会長)の突然の死により草加に帰郷し、市内に内科医を開業、昭和20・11・8患者から伝染した結核のため49歳の若さで他界。
⑬	高木徳義 香川県高松市内町53 県立高松中学 第一部1年五之組	明治29・3・19高木憲彰の長男に生まれる。大正7 東京帝大(法・法・仏法科)入学、大正10卒、弁護士。丸ノ内3-12仲3号館に法律事務所。 【著作】『積極的な司法警察吏』法律春秋3巻11号(昭和3年)44頁
⑭	鈴木倉之助 (原) 東京市麹町区飯田町1ノ7 (現) 東京市牛込区天神町54 暁星中学 第二部1年一之組	(大正4年より名簿に記載なし)

「駄弁る」ことは一高生の得意の場面であり、安孫子も熱心なその一人であった。

なお、金田一他人の部屋は北寮3番室、同室者は川崎貞明（第一部二之組。安田生命専務取締役）、工藤宏規（第二部二之組。日本窒素肥料会社から、朝鮮石炭工業常務取締役兼吉林人造石油常務理事）、前原達一（第一部一之組。三菱電機取締役）、麻生磯次（第一部一之組。国文学者）、相良徳三（第一部三之組、美学・美術史学者）、榎本発（第二部三之組。2年2留退学?）、三谷章次（第三部一之組。生命保険医）、甲藤新（第二部一之組。日本製鉄）、山根道佐（第一部五之組。大審院検事・潮恒太郎の養子となる。司法官）、小林確（第三部二之組。九州帝大医科大学進学）と、金田一他人の計11名で、相良徳三は、後に伊集院斉の筆名で金田一他人に関する文章を残している⁽⁴⁷⁾。

（イ） 9月11日（金）～15日（火）——入学式・入寮式

【223】 弥生ヶ岡草人『向陵生活』では、出頭日時が12日（土）だったはずなのに、11日（金）に教員紹介と教科書説明が行われており、12日（土）には午前中に入学式、午後に菊池寿人（【別表V-5】②）教頭による学事関係の説明が行われたことになっている⁽⁴⁸⁾。さらに、その翌日は日曜日であるにもかかわらず、「13日、今日から愈々授業が始まる。／此の日の午後新入生は午後の授業を休止して、制服制帽で再び倫理講堂に集合した」とされているのは、つじつまが合わない。

一方、『向陵誌』も、9月13日（日）を入寮式の挙行日としているが⁽⁴⁹⁾、以上に於いて、大鐘義人（【別表V-3】⑭）の日記にあつては、まず出頭日である12日（土）の条には次のようにある⁽⁵⁰⁾。

始めて、制服を着て、柏葉の帽子を被って、学校へ出た。何だか降ったり止んだりおかしな天気だ。今日は別に式と云ふでもない。只教師の紹介と教科書の表示とだけだ。先づ第一に箭内〔互。【別表V-5】⑳〕といふ歴史の先生が入って来た。此人が何でも主任らしい。次は、大津〔康。【別表V-5】㉑〕といふ、独逸語の先生瘦せた人だが、ニタニタ笑って居る。只本の名だけを云ってすぐ出て行った。其次は青木〔正。【別表V-5】㉒〕といふ国語の教師

(47) 伊集院斉①「島木家に起つた『結婚変調曲』／ブルジョア娘の恋愛圧殺の方法は何？——姉の復讐の材料になつた男」婦人公論16巻4号（188号、昭和6年4月号）156頁、同②「無言煉獄の記録——姉の復讐の材料になつた男の話（2）」同5号（189号、昭和6年5月号）338頁。

(48) 弥生ヶ岡草人『向陵生活』前掲注（31）30-36頁。

(49) 『向陵誌（第1巻）』（第一高等学校寄宿寮、昭和12年……〔復刻版〕一高同窓会、昭和59年）283頁。

(50) 『義人遺稿』【別表V-3】⑭147-148頁。

背の高い人だ。此人は、入学試験の時に、書取の文章を読んだのだ。

其次是、英語の岡田〔実磨。【別表V-5】③〕といふハイカラな先生、一番長く話して行った。

次が塩谷〔時敏。【別表V-5】④〕さん、鬚髯蓬々と生えた、元気のい、爺さんだ。

其次にしびれの切れる程、長い間、待たせて入って来たのが、名高い岩元〔禎。【別表V-5】⑤〕先生蒼顔肅々として入って来る。もう大分待ち草臥れて、帰って居た。劈頭第一に曰く、「私は1週に8時間も出てやるから、100頁位の薄ペラな本は、1学期の内にやっしまふ。諸君はそれを悉く暗記してしまふのだ。その出来ない奴は、永久に独逸語とは、縁がありません。」「書物に仮名をつけるのは絶対にいけません、若しも仮名をつけるものは、見付次第に本を引き破ります。」年来一高数千の健児を悉く戦慄せしめた岩元さんはやっぱり、俺達にも、恐ろしい。岩元さんが去った後は室中の低気圧が一時に去った様だ。えらい人もあるもんだい。

大鐘の日記に翌13日（日）条はなく、週明けの14日（月）条では同日が入校式とされている。⁽⁵¹⁾

今日も雨である。いつ止むとも、果てしの知れぬ空は、底の底までどす黒く濁って居る。今日は入校式があるので、早く出掛けたが、渋谷の停留所当たりの泥水の海と化してゐるので閉口した。

入校式の時、乃公の組は、講堂に入るのが遅かった為に、立ち往生だ。校長〔瀬戸虎記。【別表V-5】①〕が護国旗の由来を説いて、嘗つては、

先帝陛下の御会釈を賜った光栄の歴史を有する旨を説いた時は一高精神の洗礼を受けた様な気がした。⁽⁵²⁾更に細目に入ってから、談話として、11時半に及ぶ。

そして、大鐘の日記では、翌15日（火）が入寮式の日とされており、大鐘はこの日になって中寮2番室に入室している。⁽⁵³⁾

イ 第一部丙類（独語クラス——四之組）

【224】 翌9月16日（水）の大鐘の日記には、丙類（四之組）で始まったドイツ語の授業について、次のようである。⁽⁵⁴⁾

(51) 『義人遺稿』【別表V-3】④148-149頁。

(52) 〔七戸注〕明治22年大日本帝国憲法発布の際に作られた「護国旗」（深紅の地に智恵の女神ミネルヴァの象徴・橄欖（オリーブ）と軍神マルスの象徴・柏葉をあしらった一高の校旗）に、明治天皇が会釈した逸話については、弥生ヶ岡草人『向陵生活』前掲注（31）43-35頁参照。

(53) 『義人遺稿』【別表V-3】④149頁。

(54) 『義人遺稿』【別表V-3】④149-150頁。

〔別表V-5〕 我妻1年次の一高職員（大正3年9月末調）

①	学校長	瀬戸虎記	高知士 理学士……*『向陵生活』37頁、46頁、134頁、155頁、157頁、171頁、180頁、182頁、196頁、199頁、200頁、273頁、285頁、298頁、『一高ロマンス』206頁
I 教務部			
②	教頭	菊池寿人	岩手平 教授 文学士……*『向陵生活』39頁、182頁、202頁
I-1 学科主任			
③	第一文学科主任	齊藤阿具	埼玉平 教授 文学士……*『向陵生活』224頁
	第二文学科主任	菊池寿人	=②
④	第三文学科主任	塩谷時敏	東京士 教授……*『向陵生活』71頁、171頁、211頁
⑤	第一語学科・ 第四理学科主任	小島憲之	東京士 教授 バチェロル・オブ・アーキテク チュール（米国コルネル大学）……*『向陵生活』 217頁、221頁
⑥	第二語学科主任	菅虎雄	福岡士 教授 文学士……*『向陵生活』72頁、 218頁
⑦	第三語学科主任	杉田義雄	東京士 教授……*『向陵生活』224頁
⑧	第一理学科主任	須藤伝次郎	高知平 教授 理学士……*『向陵生活』212頁
⑨	第二理学科主任	菅沼市蔵	静岡平 教授 理学士……*『向陵生活』224頁
⑩	第三理学科主任	広瀬帰芳	愛知平 教授 理学士……*『向陵生活』224頁
I-2 教授			
	図画	小島憲之	=⑤
⑪	数学	保田棟太	大分平 理学士……*『向陵生活』221頁
	漢文・作文添削	塩谷時敏	=④
⑫	漢文・作文添削	島田鈞一	東京士……*『向陵生活』224頁
⑬	英語	村田祐治	東京平……*『向陵生活』216頁
⑭	独語	保志虎吉	東京士
⑮	国語・作文添削	今井彦三郎	宮城平……*『向陵生活』224頁
	国語・作文添削	菊池寿人	=②
	物理	須藤伝次郎	=⑧
	歴史	齊藤阿具	=③
	化学	菅沼市蔵	=⑨
⑯		谷山初七郎	鹿児島士……*『向陵生活』46頁、130頁、157頁、 171頁、180頁、222頁、285頁、298頁、『一高ロマ ンス』111頁、119頁、191頁
⑰	英語	畔柳郁太郎	山形士 文学士……*『向陵生活』91頁、215頁
⑱	数学	数藤斧三郎	鳥根士……*『向陵生活』221頁
⑲	国語・作文添削	杉敏介	山口市 文学士……*『向陵生活』214頁
⑳	外国留学中	丸山通一	愛媛士

21	独語	岩元 禎	東京士 文学士……*『向陵生活』32頁、202頁、249頁、278頁、『一高ロマンス』179頁（岩本）
22	物理	山川弘毅	埼玉平 理学士……*『向陵生活』224頁
	独語	菅虎雄	=⑥
	地質鉱物学	広瀬帰芳	=⑩
23	独語	三浦吉兵衛	宮城平 文学士……*『向陵生活』219頁
24	独語	三並良	愛媛士……*『向陵生活』219頁
	仏語	杉田義雄	=⑦
25	倫理・心理・論理・独語	速水 滉	岡山士 文学士……*『向陵生活』32頁、219頁、224頁
26	漢文・作文添削	安井小太郎	宮崎士……*『向陵生活』224頁
27	動物学	高橋堅	青森平 理学士 ドクトル・オブ・フキロソフィー（米国シカゴ大学）……*『向陵生活』220頁
28		熊谷幸之輔	愛知県立医科専門学校長 医学士
29	独語	葉山万次郎	東京士 文学士……*『向陵生活』32頁、219頁
30	英語	岡田実麿	広島平 パチェロル・オブ・アーツ（米国オベリン大学）……*『向陵生活』215頁
31	英語	岡本中之丞	宮城平……*『向陵生活』218頁
32	東洋歴史	箭内互	福島平 文学士……*『向陵生活』222頁
33	英語	森巻吉	岐阜士 文学士……*『向陵生活』89頁、216頁
34	仏語	石川剛	東京平 ドクトル・エス・レットル（仏国パリー大学）……*『向陵生活』223頁
35	外国留学中	内藤丈吉	富山平 理学士
36	数学	渡辺孫一郎	栃木平 理学士
37	独語	大津康	山梨平 文学士……*『向陵生活』218頁
38	国語・作文添削	青木正	兵庫平 文学士……*『向陵生活』224頁
I-3 外国教師			
39	英語	ジョン・ニコルソン・セーモール	パチェロル・オブ・アーツ／メデシン／ソルジョリー（英国ダブリン大学）……*『向陵生活』130頁
40	独語・羅甸語	エルンスト・エミール・ユンケル	
41	英語・羅甸語	エルンスト・ウィルソン・クレメント	パチェロル・オブ・アーツ、マストル・オブ・アーツ（米国シカゴ大学）……*『向陵生活』130頁、182頁
42	仏語・羅甸語	アンリー・ハンベルクロード	バカロレヤ・エス・レットル、リサンシエー・エス・レットル、ドクトル・アン・テオロジー
I-4 助教授			
43		今井孝治	東京士 兼書記

④4		安江豊太郎	島根士
④5	図画・測量	平井富夫	東京士 陸軍歩兵中尉
④6	地質・鉱物	和田八重造	奈良平
I-5 嘱託講師及教員 (就職順)			
④7	兵式体操	米田源次郎	東京平……『一高ロマンス』199頁
④8	武式体操	大沼浮藏	東京平……*『向陵生活』38頁、224頁、253頁、『一高ロマンス』167頁
④9	経済通論	中隈敬藏	東京平 文学士……*『向陵生活』224頁
⑤0	英語	和田正幾	東京士
⑤1	独語	吉田謙次郎	東京士……*『向陵生活』219頁
⑤2	兵式体操	海部治夫太	徳島士 陸軍歩兵少尉
⑤3	兵式体操	鮫島精一	鹿児島士 陸軍歩兵少尉
⑤4	法学通論	棚橋愛七	東京平 法学士……*『向陵生活』224頁
⑤5	独語	上村清延	鹿児島平 文学士……*『向陵生活』219頁
⑤6	国語	大町芳衛	東京平 文学士……*『向陵生活』224頁
⑤7	数学	熊沢鏡之介	愛知士 理学士
⑤8	英語	石川林四郎	栃木平 文学士……*『向陵生活』218頁
⑤9	測量	草間偉瑳武	長野平 工学士……*『向陵生活』224頁
⑥0	兵式体操	岩井良藏	東京平 陸軍歩兵中佐……*『向陵生活』134頁(発火演習統監)、151頁、155頁、157頁
⑥1	植物	三宅驥一	兵庫平 理学博士……*『向陵生活』219頁
⑥2	兵式体操	斉藤徹男	宮城平 陸軍歩兵少佐……*『向陵生活』151頁、224頁(体操科目の主任)
⑥3	法学通論	柳川勝二	東京士 法学士……*『向陵生活』224頁
⑥4	修身	大島正徳	神奈川平 文学士……*『向陵生活』224頁
⑥5	化学	堀鉞之丞	愛知士 理学士……*『向陵生活』224頁
⑥6	法学通論	末弘巖太郎	大分士 法学士……*『向陵生活』86頁、224頁では「げんたらう」のルビがふられている
⑥7	弓術	本多利実	東京士……*『向陵生活』86頁
⑥8	撃剣	檜山義質	東京士……*『向陵生活』72頁
⑥9	柔道	長岡秀一	東京士
I-6 助教 (就職順)			
⑦0	化学	鈴木衡平	静岡平
⑦1	生物	三上德行	青森平
⑦2	物理	大柳宇一郎	岡山平
⑦3	化学	加藤貞夫	愛知平
⑦4	化学	友野四郎	東京平
⑦5	物理	河合常次郎	石川士
⑦6	生物	向坂道治	神奈川平

I-7 図書掛			
	図書主任	齊藤阿具	= ③
		今井孝治	= ⑬
⑦⑦		鈴木弥吉	静岡平 書記
⑦⑧		平野春政	東京士
I-8 教務掛			
		安江豊太郎	= ⑭
⑦⑨		岩佐竹二郎	東京士
⑧⑩		松尾恒彦	東京士
II 庶務部			
	営繕監督	小島憲之	= ⑮
	蒸気期間並電灯監督	須藤伝次郎	= ⑰
II-1 庶務掛			
⑧①		後藤東	東京士 書記
⑧②		大沢義一郎	東京平
⑧③		高橋忠吉	青森平
⑧④		中村重憲	茨城士
II-2 会計掛			
⑧⑤	会計主任	杉山素輔	東京士 書記
⑧⑥		吉田安治	東京士 書記
⑧⑦		権田清次郎	東京平
III 寮務部			
	生徒監	谷山初七郎	= ⑱
III-1 寮務掛			
⑧⑧		三好長暉	東京士 書記
⑧⑨		江口国彦	鹿児島士 書記
		米田源次郎	= ⑲
		大沼浮蔵	= ⑳
		海部治夫太	= ㉑
		鮫島精一	= ㉒
III-2 摂生掛			
⑨⑩	医長	中山敏樹	大阪士 医学士……* 『向陵生活』 310頁
⑨①	医員	相田文二	新潟平
⑨②	医員	石沢泰一郎	茨城平
III-3 警備掛			
		大沼浮蔵	= ㉓

岩元さんが3時間ある。朝2時間ぶつづけにあった時に、名詞の変化で以て大分牛耳られた。あんまり牛耳られて終に上ってしまっていて、das dressと英独同盟をやったのは自分ながら可笑しかった〔das Kleidの言い間違い〕。

混沌として、独逸語が解らなくなる。室へ帰って来て、机に向って、復習予習をやり、まるで暗中模索だ。困るもの豈夫子独りのみならんや。

「偉大なる暗闇」岩元禎（〔別表V-5〕⁽⁵¹⁾）は、歴代の一高生を苦しめた名物教師であったが、しかし、実際のところは、「独法にはドイツ語の先生は、外人1人と邦人が2人であったため、岩元先生に零点をつけられても、他の先生のほうをしっかりやれば、点の埋め合わせとなつてとにかく落第だけは免かれた」⁽⁵⁵⁾のであった。

また、岩元が、教科書に読み仮名を振っているのを見つけ次第、本を引き破ったのも事実であるが、林要が河西太一郎と同級だった頃（林と河西は我妻より1年前（大正2年）に一高（第一部丙類）に入学したが、河西は2年生を留年して我妻と同級になり、林は大学1年入学時に休学して我妻と同級になる）、岩元は、河西の本を引き破ったうえ床に投げつけ靴のかかとで踏みにじってから、「まだ2冊南江堂に余分がとつてある。金をやるから買ってこい！」と吐きすてるように言って、50銭玉をつまみ出したというから、教科書を⁽⁵⁶⁾引き破るのもまた、芝居がかった所作の一環なのだろう。

【225】一方、教室の座席は、成績順に後ろから並んでいた。この点については、伊藤武雄（〔別表V-3〕⁽⁵⁷⁾）の文章を引こう。

われわれは大正3年9月入学の一部丙類（いわゆる「独法」）クラス、新入生

(55) 『三輪寿壮の生涯』〔別表V-3〕③113頁〔赤司卓治〕。岩元は我妻らのクラスを3年間を通じて教えたが、岩元のほかドイツ語を担当した日本人教師は大津康（〔図表V-5〕⁽⁵⁷⁾）と上村清延⁽⁵⁵⁾、外国人教師はユンケル（〔Ernst Emil JUNKER : 40〕）とケール（Robert KEEL : スイス人、我妻らが2年～3年次のドイツ語・ラテン語教師）であった。岸信介・前掲Ⅲ注（133）①『我が青春』131-132頁、②『私の履歴書』48-49頁。

なお、岸信介①『我が青春』132-133頁には、一高時代に教わった先生が列挙されており、「英語の岡田実磨〔〔図表V-5〕⁽⁵⁰⁾〕先生は一高らしくない先生で、皮肉で学生の受けが頗る悪かった」などと記しているが、我妻の文章にも「東北の田舎の中学を出て、英語などはからきしでできなかった私は、岡田実磨という先生から『君の英語はさっぱりわからんと思ったら、日本語もわからんね』などとやっつけられて、やっきとなって勉強した」とある（我妻榮「想い出の中の岸信介君」風聲11号（昭和31年）……〔所収〕我妻榮『民法と五十年・その2——随想拾遺（上）』前掲Ⅱ注（87）328頁、岸信介①『我が青春』201頁）。

(56) 林要『おのれ・あの人・この人——サンチョ・パンサ回想記』（法政大学出版局、昭和45年）28頁。

(57) 伊藤武雄「57年の歳月をたどって」前掲注（45）177頁。

38名と留年2名⁽⁵⁸⁾（一高での留年は一種の自慢で、各学年を2年ずつ暮し、6年がかりの者がいた）の19から20才の若者が、いわく附きの古机の前に、入学試験成績順に、後ろからならんで坐っていた。黒い奇妙なガウン姿の教師が、出席簿片手に教場に現れ、点呼を始める。そこでお互に顔と名を覚えたわけだ。後列の最右翼から、米沢から出てきた我妻栄〔別表V-3〕⁽⁵⁹⁾が、返事をする。最前列の私の隣が、童子の顔をした安孫子理兵衛〔38〕、その隣は岸信介〔31〕、何れも地方中学の出身である。

（ア）岸信介

【226】このうち、岸信介に関して、我妻は、次のように記している。「第一高等学校時代は、それほど親しくはなかった。独法40人のクラスで、私は偶然にも首席で入学したが、彼はピリから3番目くらいだった」。「彼は、悠々、歌舞伎の助六に感心したり、娘義太夫の〔豊竹〕昇菊、昇之助〔姉妹〕に魂を奪われたり、それでいて、1学期の成績で一躍3番に上ってきた。エライやつだなと驚かされた」。

一方、赤司卓治〔別表V-3〕⁽⁶⁰⁾も次のようにいう。「岸は一高時代……から多趣味な男だった。碁に凝ったのをはじめ、当時の青年がなしたように、内外の文学書を耽読するかと思うと、他面には芝居や寄席に通いつめたが、ちょっと変わった道楽は、〔豊竹〕呂昇、〔竹本〕朝重、〔竹本〕小土佐などの娘義太夫に病みつきになったことである⁽⁶¹⁾」。また、「彼は一高に入学した当初から、すでに煙草をおおびらにすばすば吸っていた。中学を出たばかりの青年としては、当時では珍しく、こんなに初めから煙草をすっていたのは、クラスでは彼と中島寅之助⁽⁶²⁾（20）の2人きりで」あった。このほか、赤司によれば、一高の寄宿舎に「入寮の初め、碁を知っていた者は、岸信介、我妻栄、三輪寿壮〔別表V-3〕⁽⁶³⁾、森喬⁽⁶⁴⁾。【1】の4人だけ

(58) 〔七戸注〕この2名は、大正3年入試合格組以外の5名（前掲注（17）参照）のうち、転科と休学を除く落第組を指すものであろう。

(59) 我妻栄「想い出の中の岸信介君」前掲注（55）〔所収〕『民法と五十年・その2——随想拾遺（上）』328頁、岸信介①『我が青春』201頁。

(60) 『三輪寿壮の生涯』〔別表V-3〕⁽⁶³⁾137頁、142頁〔赤司卓治〕。

(61) 〔七戸注〕岸自身も「私は先にも述べたように中学時代は余り読書家ではなかったが、高等学校時代はあらゆる書物を渉獵した。いささか濫読の傾向があって何等系統立っては居なかった。哲学、宗教に関するものも素より呼んだ。小説や歌集などの文芸物も手当たり次第読んだ」と述べる。岸信介・前掲Ⅲ注（133）①『我が青春』129-130頁（具体的な書籍名につき133-135頁）、②『私の履歴書』47-48頁。

(62) 〔七戸注〕娘義太夫熱に関する岸自身の言として、岸信介・前掲Ⅲ注（133）①『我が青春』139頁、②『私の履歴書』50頁。

しかいなかったの、クラスのほとんどがこの4人を先生として根津の茶寮で囲碁会を始めた」という。⁽⁶³⁾

なお、赤司によれば、「三輪寿壮が福岡県、岸が山口県、私が佐賀県。この3人が一高時分から非常に仲が良かった」。⁽⁶⁴⁾

(イ) 赤司卓治

【227】 赤司卓治〔別表V-3〕⑬は、一高1年次に同室（西寮11番室甲）だった三木清と同様、大学は京大に進み、大学卒業後は大阪で弁護士を開業するが、「第2次世界大戦前、岸信介が東条内閣の商工大臣になった時、三輪〔寿壮〕は岸と相談して筆者〔赤司〕を大阪から東京に呼びよせた」という。⁽⁶⁵⁾

① シュウサイ会——その後、戦争が終わると、赤司の事務所は一高同級生のたまり場になる。「私がちょうど、あの頃銀座で弁護士をやっていたのですが、そこに集まって来るのはみんな役人でパージになった奴です。まずやってきたやつが田代重徳〔別表V-3〕⑬〕、石井康〔⑩〕。後に国鉄総裁になった長崎惣之助⁽⁶⁶⁾〔⑳〕、一昨日亡くなった三島由紀夫の父の平岡梓〔⑧〕。昭和51年12月16日没〕、それから安孫子〔理兵衛〕⑳〕、みんなやってくるんですよ。ところが今から24、5年前でみんな、50代ですから、みんな酒を飲むんですよ。きのうは2人、きょうは3人というふうに、みんなその近所の安い飲み屋に連れていく。こっちは貧乏弁護士ですから。／それからこうしているうちに、こんどは私たちのクラス以外の英法とか仏法

(63) 『三輪寿壮の生涯』〔別表V-3〕⑬114頁〔赤司卓治〕。なお、我妻と岸の囲碁に関しては、鳩山一郎が軽井沢の別荘滞在中の日記（昭和16年8月29日〔金〕条）に「曇。午後我妻、岸（信介）両氏来訪。夕食後迄碁を囲む」とある。伊藤隆＝季武嘉也（編）『鳩山一郎・薫日記（上巻・鳩山一郎篇）』（中央公論新社、平成11年）269頁。このとき、岸は、軽井沢・南原の我妻の別荘に滞在していた。岸は、前年（昭和15年）7月22日成立の第2次近衛文磨内閣で商工大臣に就任した小林一三と対立して同年12月商工次官を更迭され（翌昭和16年1月4日辞表受理）、浪人中の身であった。昭和16年4月～6月支那各地の視察旅行から帰国後、同年10月18日成立の東条英機内閣に商工大臣として入閣する2か月前の出来事である。

(64) 赤司卓治「一高シュウサイ会のこと」『田代重徳追憶録』〔別表V-3〕⑬44頁。

(65) 『三輪寿壮の生涯』〔別表V-3〕⑬116頁〔赤司卓治〕。

(66) 〔七戸注〕長崎惣之助については、我妻栄「人事草案」『法律随想——身辺雑記（1）』前掲Ⅲ注（10）118頁にも、次のような記述がある。「戦争中は、この資料〔臨時民法改正委員会「人事草案」〕を保存するために苦勞し、最後には、一高のクラスメートだった当時の鉄道次官長崎惣之助君に事情を話し、鉄道省特別取扱として、軽井沢に疎開した」。なお、伊藤隆＝季武嘉也（編）『近現代日本人物資料情報辞典4』（吉川弘文館、平成23年）「長崎惣之助」〔老川慶喜〕193頁も参照。

とかの者もくるようになった。……。それから、そうこうするうちに、この会の名前をつけようじゃないかということになり、一高時分には柔道、ボート、野球などでみな名をあげた人間だが、長崎惣之助がこういうんです。『一高シュウサイ会というのがいい』と。そこでシュウサイ会が出来た⁽⁶⁷⁾。

② シューベルト会——上記①シュウサイ会が一高第一部（甲類・乙類・丙類・丁類）全部の集団であったのに対して、昭和30年頃には、独法科の同級生だけの会も発足する。常連は、田代重徳・石井康・平岡梓・安孫子理兵衛・長崎惣之助・関屋悌蔵・長沢里治で、会名は「シューベルト会」に決まったが、音楽とは無関係の「未完成」の連中の会の意である。昭和31年東大病院に再入院した三輪寿壮を見舞ったのも（【47】）同会であり、「会名が付いてから、彼〔三輪〕は自分の病名が不治の肺臓癌であることを知らないで、『癒ったら会に入るよ』と笑って居たが、御承知の如く一昨年⁽⁶⁸⁾の暮になくなってしまった」〔昭和31年11月14日没〕⁽⁶⁹⁾。

（ウ） 三輪寿壮

【228】 一高入学試験の席次3位の三輪寿壮（【別表V-3】③）は、修猷館中学の首席卒業生で、同学年の柴田健太郎（②）・中島寅之助（⑳）のほか、前年の首席卒業生で一高1年を病気休学していた高原弘（㉓）も加えると、修猷館出身者は、クラス定員40名の1割を占めていた⁽⁷⁰⁾。

「三輪は入学当時、身長が5尺7寸〔×30.3=172.71cm〕以上、体重17、8貫〔×3.75=63.75~67.5kg〕という、当時としては稀にみる雄大なひき仕舞った体躯だったので、すぐボート部員にとられた。また中学時代から力が強かったし、特異な柔技〔体落としと背負い投げの中間技で「三輪投げ」と呼ばれた〕を持っていた彼は、柔道部でも見逃さなかつた⁽⁷¹⁾」。

【229】 三輪寿壮が「ボート部員にとられた」きっかけは、入学から1か月後の大正3年10月9日（金）隅田川で開催された各部1年各組対抗のボート・レース（組選）であった。大鐘義人の日記には、小学校時代「体操=乙」で中学は「チャッカ

(67) 赤司卓治・前掲注(64)44頁。

(68) 長沢里治に関しては、【258】参照。

(69) 赤司卓治「シューベルト会と首相」【別表V-3】⑬39頁。

(70) 『三輪寿壮の生涯』【別表V-3】③105-106頁〔赤司卓治〕。

(71) 『三輪寿壮の生涯』別表V-3③110頁〔赤司卓治〕。

り秀才」だった我妻が張り切る姿が記されている⁽⁷²⁾。

とうとうレースの日が来た、朝から太陽が輝いて、何となく爽やかな日だ。教室へ入ってもボートの話で持ち切りだ。

午食を済ませて、直ちに、隅田川へ向ふ、長命寺に行って時間の来るのを待つ。

粟谷〔栗屋仙吉〕、松井〔驥〕、菊谷〔真〕、鈴木〔清秀〕、松宮〔隆〕、森島〔守人〕なんぞの先輩が、皆居て〔彼ら丙類（四之組）2年生は1年生にボートの漕ぎ方を手ほどきした〕、景気の好いこと夥しい。其内に、声援隊もやって来た。鍛冶〔嘉治隆一〕。〔別表V-3〕⑦ 我妻〔栄。①〕なんぞ、舟を借りて、用意して居る⁽⁷³⁾。実際組選の様の気がしない。ミックスがあって、僕の乗った舟がハウル〔ファウル〕したが、白帽を被った関屋〔悌蔵。⑤〕のボートが勝った。

その後の本戦では丙類——メンバーは「三輪寿壮〔2番。③〕、長崎惣之助〔3番。②〕、石井康〔5番。⑩〕、秋山雄一〔トップ。②〕、中島寅之助〔4番。②〕、大鐘義人〔整調。④〕の6名が漕手、関屋悌蔵〔⑤〕が舵手」——が圧勝し、「選手一同ズラリと並んで、関屋が賞品を、僕〔大鐘〕が優勝旗を取りに行った時は、実際夢の様だった。／それから揉みに揉んで、長命寺に来て、茶を飲み、1週間目に甘く甘く菓子を喰った。実際こんな嬉しいことはない。／夜、恵知勝〔江知勝〕で、飲んで食って、大いに騒ぎまわる。今夜の牛肉の味と灯の色と。又比すべきものもない。其元気で以て、優勝旗を先きに、町を縫って歩いて、寮に帰って、全寮大ストームをやった⁽⁷⁴⁾、痛快痛快」。

(72) 『義人遺稿』〔別表V-3〕④150-151頁。

(73) 『七戸注』なお、三木清は、「独法の我妻栄、三輪寿壮などの諸君もボートの関係で知り合ひになった人びとである」と述べている（三木清『読書遍歴』『読書と人生』（小山書店、昭和17年）29-30頁……〔所収〕①『三木清著作集（第1巻）』（岩波書店、昭和25年）168頁、②『三木清全集（第1巻）』（岩波書店、昭和41年）385頁、③三木清『読書と人生』（講談社文芸文庫、平成25年）29頁）。これに対して、三輪寿壮は、自分を介して三木清を知ったと赤司卓治はいう（『三輪寿壮の生涯』〔別表V-3〕③154頁〔赤司卓治〕）。

(74) 『三輪寿壮の生涯』〔別表V-3〕③118頁〔赤司卓治〕。なお、119頁掲載の優勝記念写真には、田代重徳（③）と尾形鍬亮（②）も写っている。

(75) 『義人遺稿』〔別表V-3〕④152-153頁。その後、「1学期が終ると、長崎、中島は一部の本選手になり、三輪、秋山、関屋は第2選手になった。それから組選はつぎつぎに交替して編成され、舵手に我妻栄、漕手に田代重徳、柴田健太郎、松本三千雄および筆者〔赤司卓治〕の5人が入れ替わった」。さらに、「国鉄総裁だった長崎惣之助とか、仏法科出身で、あとでは満鉄でその声名を高からしめた土肥頼などは、一高から大学を通じ、ボートマンとして常に端艇部を牛耳っていた。』〔別表V-3〕③120頁、123頁〔赤司卓治〕。

【230】三輪寿壮（別表V-3）③や成富信夫（⑩、【48】）は、酒も煙草も不得手であったが、これに対して、「独法のクラスの酒仙だけでも並べると、長崎嶮之助〔27〕、清田岩夫〔19〕、田代重徳〔33〕などで、後年に至るとますます磨きを上げ、飲み出すと切りがなく、幾日もつづけざまに何も食わずに、まるで酒中に漬かっているような有様。……これらにつづいてクラスでは、成田広美〔39〕、安孫子理兵衛〔38〕、石井康〔10〕、関屋悌蔵〔5〕、重松宣雄〔9〕、その他の英雄豪傑陣がその驥尾に付していた」。

（エ） 田代重徳

【231】昭和31年9月18日（火）三輪寿壮の病室におでんを取り寄せた際、田代重徳（別表V-3）③の提案で酒を持ち込んだ件（【47】）については、岸信介も同じ思い出を語っている⁽⁷⁷⁾。それは、田代の没後（昭和45年10月9日死去）50日の会合での追憶談で、岸は、次のようにも述べていた。⁽⁷⁸⁾

大学に行きましてからは、私は勉強しましたのであまり付き合いをしなかったのですが、本人、今日はこないんですが、我妻と競争して勉強したようなこともございまして、田代君と会うことも少なかったのですが、高等学校時代は、何ととっても一緒でありました。ときどきドイツ語のユンケル氏をいじめてみたり、あるいは代わって返事をして出席を頼むというような高等学校時代の生活をともにしたのであります⁽⁷⁹⁾が⁸⁰。

田代重徳（明治29年5月15日生まれ）は、著名な整形外科医（東京帝大医科大学教授から東京・下谷の田代病院院長）田代義徳の二男。岸らが田代の家を訪ねて「おーい、ジュウトク（重徳）いるか」という呼び出しをしたら、きれいな女中さんが出て三つ指をつけて、『あの一、シゲさまでございませうか』とこういわれたのです。それから帰ってきて『おい、田代はあれでシゲさまなんだぞ』と喋って話したことがありました⁽⁸⁰⁾という家庭である。

(76) 『三輪寿壮の生涯』別表V-3 ③143-144頁〔赤司卓治〕。

(77) 岸信介「田代君の思い出」『田代重徳追憶録』別表V-3 ③17-18頁。

(78) 岸信介・前掲注(77) 19頁。

(79) 〔七戸注〕ユンケルに関しては、『三輪寿壮の生涯』別表V-3 ③155頁〔赤司卓治〕にも、「国技館の相撲も、ドイツ語のユンケル先生の時間をすっぽかして12、3名の集団で見に行っ、あとでそれがばれて、譴責をうけたことさえあった」とある。

(80) 岸信介・前掲注(77) 17頁。

名門・東京高等師範学校附属小学校・中学校からの進学組であるが、我妻の長男・洋の文章には、次のようにある。

父が第一高校に入学した時、東京一中〔現：日比谷高校〕や四中〔現：戸山高校〕出身の秀才たちが、父が聞いたこともない外国の哲学書の名を口にしたり、如何にも人生の真理をわきまえた風であるのに、父は驚き、圧倒された。だが、そのうちに、彼らの思想が案外底が浅く、その理解も生半可であることがわかると（それがわかったのは、やはり父が並々ならぬ頭脳の持主だったからに違いない）、父は彼らの態度を、軽薄で鼻持ちならぬと思うようになった（「一中や四中の出身者の中には、悪い意味での都会の秀才の典型がいる」と父はよくいていた）。やがて父は、同じ都会人でありながら、そうした軽薄さを持合わせぬ人物が身近にいるのに気付いた。「都会的に洗練され、貴公子然として、軽薄さや小利巧さのない人物」それが、斉藤直一氏と田代重徳氏であった。父は、お二人の出身校が東京高等師範学校附属中学校であるのを知った時、「将来自分の息子たちは付属に入れよう」と決めたのだそうである。

一高時代柔道部員として活躍した田代は、大正9年東大卒業後外務省に入省⁽⁸²⁾、戦後の公職追放後は、講道館国際部長となる。

(オ) 斉藤直一

【232】 一方、斉藤直一（〔別表V-3〕^②。木下空太郎（太田正雄）の甥⁽⁸³⁾）は、我妻について、次のように語っている。「当時もちろん学校の制服はあったけれども体操のとき着る位のもので、教室へはほとんど紺緋に袴草履ばき、外出には黒い羅紗のマントといういでちが多かった。我妻君のこういう姿を見ている人は今はもう尠いだろう。」「勉強家の割には余裕も綽々で、柔道場の畳敷きが稽古の終わったあと一隅にオプスト（果物屋）も出て娯楽場になる。そこで時々碁や花札で遊んでいる我妻君を

(81) 我妻洋「不肖の子・続篇」前掲Ⅱ注(32)407-408頁……〔所収・改題〕「不肖の子」前掲Ⅱ注(32)238-239頁。

(82) 東大卒業の年に大審院判事・横田秀雄の長女・千鶴子（横田正俊の妹）と結婚するが、昭和9年に死別（横田正俊「重徳君と69回」『田代重徳追憶録』〔別表V-3〕^③152頁）、昭和13年那須章弥の長女・東美枝と再婚。

(83) 木下空太郎（太田正雄）は、太田惣五郎・いと夫婦の4女3男の末子で、三姉のたけ（竹子。樋口一葉の友人）が、斉藤直一の父・斉藤十一郎に嫁いだ。

(84) 斉藤直一「一高で知り合ってから」『追想の我妻栄——険しく遠い道』前掲Ⅰ注(63)29頁、30頁。なお、斉藤直一は、明治28年10月28日東京市本郷区駒込西方町生まれ、司法官（大阪控訴院長・関西大学学長）斎藤十一郎の長男。

見たこともある。無能の私は仲間に入らなかったがこういう勝負ごとにも達人だったようだ。またこんな覚えもある。よく落語家がやる『千早ふる神代も聞かず竜田川からくれないに水くぐるとは』をもじり、千早や神代に振られた力士竜田川が豆腐のおからも貰えないので入水したそうだという冗談をいって、誰かが『とは』とは何だと聞くとそれも女の名前だとニヤリと返事する程の滑稽味も持っていた。

一高時代の斉藤は、森喬⁽⁸⁴⁾【1】とともに旅行部で活躍⁽⁸⁵⁾、東大卒業後は司法官となり、昭和35年10月定年退官後は弁護士登録。

【233】 以後の斉藤は、定年退官の年に三島由紀夫が発表した小説『宴のあと』をめぐる裁判をきっかけに、三島とかかわるようになる。この裁判は、小説のモデルとされた有田八郎（元外務大臣。昭和34年東京都知事選挙に立候補し落選）が、三島と出版社を相手に提起した、プライバシー侵害を理由とする不法行為に基づく損害賠償請求事件⁽⁸⁶⁾で、第1審は原告の請求を一部認容したため⁽⁸⁷⁾、被告は控訴し、控訴審の訴訟代理人に加わったのが、斉藤直一と勝本正晃であった。斉藤への依頼は、三島の父・平岡梓によるもの⁽⁸⁸⁾、勝本への依頼は、斉藤によるものである⁽⁸⁹⁾。

だが、昭和40年3月4日に有田八郎が死去し、遺産分割協議により長女が訴訟承継した後、1年後の昭和41年4月に被控訴人側から和解の申出があり、同年11月28日訴訟上の和解が成立して、無修正での出版に至る。なお、斉藤によれば、「右

(85) 『一高旅行部五十年』（第一高等学校旅行部縦の会、昭和43年）には、斉藤直一「大正5年度の行事」22頁、森喬「邪道記」214頁の記事があり、斉藤の記事には、斉藤・森と同じ丙類2年の伊藤武雄（【別表V-3】⁽⁸⁰⁾）・安孫子理兵衛⁽⁸⁸⁾・歌田千勝⁽²⁵⁾・尾形鉸亮⁽²⁶⁾・大鐘義人⁽¹⁴⁾・三輪寿社⁽³⁾・鈴木八郎⁽¹⁵⁾のほか、乙類2年の阿部孝（【185】⁽¹⁾）、甲類1年の田中誠二、丙類1年の木村清司（【1】）、丁類1年の小林巳智次の名が認められる。

(86) 昭和36年3月15日訴え提起。原告訴訟代理人弁護士は宮崎龍介と森長英三郎、被告訴訟代理人弁護士は菅野勘助と塚本重頼。なお、三島由紀夫の旧蔵書の中には、①「法律時報」33巻5号（昭和36年5月……「最近の名誉・プライバシー問題」特集）、②「法律時報資料版」7号（昭和36年7月……「名誉毀損・プライバシー関係資料」を収録）があり（①・②とも現在は筆者〔七戸〕蔵）、このうち①の表紙に記載された特集執筆者（全10名）のうち、四宮和夫・道田信一郎・遠田新一の名の前に鉛筆で「○」印がつけられている。

(87) 東京地判昭和39年9月28日下民集15巻9号2317頁。詳細は富田雅寿（編）『「プライバシー宴のあと」公判ノート』（唯人社、昭和42年）参照。

(88) 斉藤直一（聞き手：野村正男）「（あの人この人訪問記・第132回）斉藤直一さん（下）」法曹253号（昭和46年）20頁。

(89) 斉藤直一「『宴のあと』訴訟事件を想い三島君を偲ぶ」『三島由紀夫全集・第13巻（小説13）』（新潮社、昭和48年）付録〔栞〕6号2頁。

和解のとき私が主として交渉に当たった相手方弁護士は3人いた中の一人宮崎龍介君であったが、一高の1年先輩で若い頃とちがい白い立派な鬚のため見ちがえた。彼は三島君に好意的で話はし易かった」という⁽⁹¹⁾。

[234] その後、斉藤は、三島の遺著『豊饒の海』のうち第2巻『奔馬』（昭和44年2月刊行）と第3巻『暁の寺』（昭和45年7月刊行）の取材の世話をしたが、三島は「昨年〔昭和45年〕春から遺言状作成の法律のことなど聞きに来られ取材のためとっていましたら、6月になると自分が遺言状を作っておきたいのだ、……ただ極秘のうちにというたつての話して、……私は、用意周到なことと思ひ内容についての相談にも乗ってあげ、公証人に遺言公正証書を作って貰うお世話をし、遺言執行者になることも承諾してあげたのでした。……丁度昨年〔昭和45年〕6月30日ですが、その頃すでに堅く決心していたのですね〔三島の自決は同年11月25日⁽⁹²⁾〕」。

三島が事件当日生き残りを命じた3人に手渡した「命令書」には「弁護については元大阪高等裁判所長斎藤直一先生に相談せよ」とあった一方、斉藤宛にも遺書が遺されており、「ペン書ですが筆勢文章に少しも乱れもなく、生前世話になった礼、遺言状作成のときは事が話せなかったが今おわかりと思うけれどもなど書いてある次に、皆死を決して参加してくれたのに苦難に耐えて生き残ることを命じた同志学生たちの弁護の件につきお願いしたいと便箋1枚半にわたって『小生の悲願であります』とまで結んで書いてあるのです⁽⁹³⁾」。

そのため、斉藤は、「私のような刑事訴訟をやったことのないものがやるのもどうかと思い、先ずさし当てるの用事から私の事務所の酒井亨弁護士にたのみ、……、裁判官出身で草鹿浅之助さん検察官出身で野村佐太男さんをお願いすることができました⁽⁹⁴⁾」。

(カ) 平岡梓

[235] 一高時代、我妻と一緒に組選のボートを用意した嘉治隆一（〔別表V-3〕⑦）。

(90) 〔七戸注〕原告側も控訴審で訴訟代理人弁護士を1名追加しているが、氏名は調べ切れていない。

(91) 斉藤直一・前掲注(89)3頁。

(92) 斉藤直一・前掲注(88)20頁。

(93) 斉藤直一・前掲注(88)20頁。

(94) 斉藤直一・前掲注(88)20頁。裁判の詳細については、伊達宗克『裁判記録「三島事件」』（講談社、昭和47年）、平岡梓『伴・三島由紀夫（没後）』（文芸春秋、昭和49年）参照。

【229】）は、昭和26年三島由紀夫が朝日新聞特別通信員として海外旅行に赴く際の世話をしているが、父・平岡梓⁽⁹⁵⁾に関しては、次のような文章を残している。

三島君の親父、平岡梓〔⑧〕は私にとって実に45年来の旧友である。しかも一高独法1年の時に教室でずっと隣合せに坐っていた間柄である。またそれより3ヵ月ほど前のこと、一高へ受験の願書を出しに行った時、300人近かった独法志願者の行列のトップに立ち、受付の開始を待っていたのも彼であった。私も割りに前の方に並んでいたが、こんな時、先頭に立つような気の早い人間は、どんな男だろうかと、ちょっとした興味を覚えていたので、よくその顔を見極めておいた。そしていよいよ秋の新学期が始った時、果してあの男が入学しているかどうかと思って教室を見廻したところ、思いきや、お互いが隣同士になっていたのには驚いた。

その頃の一高では、特に独法系統では、漱石の『三四郎』に「偉大なる暗闇」として出て来る岩元禎教授が甚だ神秘的な人間として煙たがられていた。我々のクラスは3年間この仁にドイツ語を教わり、最後の3年生の時はクラス担任の教師でもあった。1年の時など1週14時間のドイツ語授業のうち、8時間がこの仁の受持で、1日に2度教室で顔を合せることが毎週2日もあったわけだ。この人は教え方が酷しいので有名で、教科書に仮名でもつけているのが見つかると、とても怒って教壇を降りて来て、いきなり本を引たくって引裂いてしまうくらいのは朝飯前であった。ところがである。平岡だけは薄いパラピン〔パラフィン〕紙を本の間に挟み、短く切った鉛筆を指の股に潜ませて、前の生徒の背中⁽⁹⁶⁾の辺でコチョコチョコとそのパラピン紙の上に、岩元教授の頭から棒読みに本を読んでどしどし訳して行く風変わりな訳語を小さな字で書き入れることに成功した。そして後から休みの時間に級友たちに向って級前よく、岩元教授の訳し癖を再現して教えてやったりするのであった。そのたびに我々は平岡の器用さと、芸の細かさ、綿密な才能の持主であることを認めないでは居られなかった。しかもそんなに苦勞して取ったメモを、いつでもあっさり級友に開放していたのは、いかに彼が好人物であることを証拠立てるものであった。高校時代では勉強に打込むよりは、まず心身を鍛えてなどと、呑気な朝夕を送っていた我々にはとても真似の出来ない特殊技能であった。

(95) 嘉治隆一「三島由紀夫」『人物万華鏡』（朝日新聞社、昭和42年）362-363頁。なお、嘉治隆一「くぼん製」『人物万華鏡』364-365頁も参照。

*

気の早いこと、芸の細かいこと、思慮の綿密なこと、そしてどこまでも人の好いこと、このような親父の若い日の特徴を長男の公威君がどんな風に伝えているであろうか。それがまだ見ぬ三島君について、私の抱いていた興味の一つであった。

(キ) 鈴木八郎

【236】一方、平岡梓は、一高同級の鈴木八郎〔別表V-3〕⁽⁹⁵⁾——歌舞伎・芝居通の文学青年である点において、平岡の息子・公威に似ている——に関して、次のような文章を残している。

一高に入って或る日のクラス会で、隠芸が始まった。誰も、彼も、碌なことのやれる者は、一人もいなかった。鈴木君の番になって、其の得意の声色に、一同驚嘆した。忽ち其の日は、鈴木デーになってしまった。実際鈴木君は、平常大人しかった、無口であった。それで皆んな、平々凡々無味乾燥な秀才以上には値踏みしてみなかったのだが、それはとんでもない錯覚であったことがわかった。反動も手伝って、それからといふもの、大芝居通となし、芸術方面といふかそちらの方には、とても造詣の深い男ときめてしまって、此の方面でわからないことがあると、何んでもかんでも、先づ鈴木君に伺を立てに出かける様になり、彼の教を一から十まで無条件に感服して聞く様になった。然し決して通ぶったりそんないや味なところは微塵もなかった、ニコニコしながらあっさり教えてくれたもんだ。惹いて、其の他の事柄に関しても、彼の物静かな態度、円満無礙なひととなりは、クラスの信認を強めて行くばかりであった。僕などはノートのお世話にまでもなったものだ。寔に此の時代から既に鈴木君は多種多方面に興味があったのだ。其の手に持ってゐる書物などをのぞいて見ても、吾々にはてんで歯のたため代物ばかりであった。

然し一面、此の君子は悪太郎の素質も豊かでない方ではなかった。ユンケル〔別表V-5〕⁽⁹⁶⁾といふ独逸人が教へてゐたが、皆んなで此の時間はエスる〔エスケープする〕ことばかり考へてゐた。そして鈴木君は逃亡術に於て決して断じて人後に落ちなかった。又ユンケルが黒板に向つて字を書きはじめると、揃っていたづらをやることも不文律であったが、其の技巧も、鈴木君のは実に垢抜けがしてゐて堂に入った

(96) 平岡梓「一高時代の鈴木君」『鈴木八郎遺稿並追悼録』〔別表V-3〕15701-702頁。

ものであった。此の時間に限って、鈴木君は平常とは全く別人の様に、はしゃぎ出し、すこぶる油が乗って、一人暴威を逞しふした。今考へても一寸不思議だ。

又岩元〔禎。〔別表V-5〕②〕といふ猛烈な先生がゐて、軒並随分ひどくいためつけられたものだが、鈴木君は要領甚だよろしく、被害回数は不当に過少であった。此の茶目気も亦彼の人気を愈々高めた一因であった。

このほか、甲類（英法科）の円地与四松は、次のように語る。⁽⁹⁷⁾

私と鈴木君との交友は一高に入ってからのものである。勿論一部独法にゐた鈴木君と英法にゐた私とはクラスメートと云ふ訳ではなかった。然し当時文学青年であった我々は、一高校友会雑誌にいろいろのものを書いてゐた。私は文芸部よりも弁論部の方に関係をもつてゐた関係上、大して書かなかつたが、鈴木君はよく小説などを発表してゐた。恰度我々が2年生——大正5年頃——であつたかと思ふが、鈴木君が「一寸とした不安」と云ふ小説を校友会雑誌に載せたことがあつた。⁽⁹⁸⁾私もそれを読んでゐたので、第二大教室かの壁に寄りかゝつてゐた時に、その小説のことから口を利いたのが恐らく最初のことでなかつたらうか。

その後、大学を卒業した鈴木は、円地に誘われて「一匡社」同人となり、機関誌「社会及国家」の編集委員として多数の論稿を寄稿するようになるが、「かつて一匡社の新年宴会を箱根の塔の沢で催した時に、……鈴木君はその晩もあらゆる芸術を發表したので、……。宴席に侍した芸者は、そつと幹事の袖を引いて『あの方は東京から連れていらした芸人さんですか』と訊かれた」ほどだつたという。⁽¹⁰⁰⁾

【237】 なお、一高の文芸部に関しては、「大正5、6年頃には三木清、谷川徹三、相良徳三が光つてゐた」。⁽¹⁰¹⁾このうちの谷川徹三は、大正2年第一部甲類（二之組）入学者（三木・相良らの1期上）であつたが、2年次を留年の後、大正5年乙類（三

(97) 円地与四松「鈴木八郎君を悼む」『鈴木八郎遺稿並追悼録』〔別表V-3〕⑮795-796頁。

(98) 〔七戸注〕鈴木八郎「一寸とした不安」校友会雑誌254号（大正5年）……〔所収〕鈴木八郎遺稿並追悼録』（〔別表V-3〕⑮）369頁。

(99) 明治41年一高卒業・明治44年～45年東大卒業の津島寿一・君島一郎・岸巖・藤井啓之助・宮沢源吉・遠藤始郎・大村正夫・額田晋が大正2年4月8日に結成した社会結社。小関有希「雑誌『社会及国家』解説・総目次——一高・帝大同窓生というネットワーク」リテラシー史研究10号（平成29年）1頁、小林俊三『わが向陵三年の記——明治四十年九月頃から同四十三年七月頃までの記』（実業之日本社、昭和53年）142頁、144頁参照。

(100) 円地与四松・前掲注（97）799頁。

(101) 『三輪寿社の生涯』〔別表V-3〕③149頁〔赤司卓治〕。

之組) 2年に転科し、三木らより1年遅れで一高を卒業して京大哲学科に進んだ。

(ク) 安孫子理兵衛

【238】 一方、円地与四松が文芸部よりも力を注いでいた弁論部には、甲類(一之組)では蛸山政道、丙類(四之組)では我妻栄・安孫子理兵衛・金田一他人や、河西太郎(大正2年入学、2年次留年組)⁽¹⁰²⁾が入部した。

安孫子理兵衛(【別表V-3】³⁸)は、明治27年2月1日山形県西村山郡柴橋村大字中郷683(現在は山形市)の豪農・安孫子好治郎(のち定四郎を襲名)・みき夫婦の長男に生まれた。柴橋尋常小学校から県立山形中学を経て一高に入学、東大時代は新人会に属し、卒業後は弁護士となるが、大正10年日本読書協会の派遣員として渡欧、12年の長期滞在の後、昭和8年に帰国した際には嘉治隆一(7)の家に転がり込み、齊藤直一(23)の世話で同潤会の江戸川アパートに入居、重松宣雄(9)の縁故で外務省調査部嘱託の翻訳官となる。戦後は弁護士に復帰。生涯独身を通して、昭和44年9月20日没。「遺骸は逝去の翌々日に近親者が集って茶毘にふしまして、去る10月8日学友の元総理岸信介様、法学博士我妻栄様を始め先輩、友人の方々及び親戚一同が参列して本葬いたしました」⁽¹⁰³⁾。

ウ 第一部甲類(英法科——一之組・二之組)

【239】 第一部(文系)の同学年のうち、丁類(仏語クラス——五之組)については、我妻と中学同窓の高橋恒次郎(【188】)・鈴木重助(【189】)の項で触れた。

甲類(英法科——一之組・二之組)には、弁論部の蛸山政道(【46】。東寮11番室乙で田原内蔵太郎(【別表V-3】²⁸)と同室)や円地与四松(東寮15番室で我妻栄と同室。【別表V-4】⁴)のほか、麻生磯次や福本和夫がいた。

(ア) 麻生磯次

【240】 福本はいう。「麻生君にあうと、彼は口のように、君とぼくとの二人は、一

(102) 三輪寿壮は中学時代には弁論部の委員、岸信介も弁論部の部長であったが、一高では弁論部に入らなかった。

一方、彼らの1学年下では、田中誠二・平野義太郎が弁論部に入部した(なお、平野義太郎の最初期の文章として、一高弁論部時代の「聖かれ義しかれ賢かれ」雄弁8巻7号(大正6年1月)154頁がある)。このほか、金沢・四高の中川善之助も弁論部に所属し、インターハイの弁論大会で優勝したこともあったという。松岡修太郎「追悼随想・中川先生の思い出」学問志向への彼の道程」前掲IV注(136)118頁。

(103) 従弟(大竹哲太郎=安孫子清水=藤木作田助)「御挨拶」『安孫子理兵衛思い出』【別表V-3】³⁸284頁。

高同級生中のかわりものだから、とって、おだやかにわらう。そして何のこだわりもなくおたがいにうちとけて、かたりあうのをつねとする間柄である。⁽¹⁰⁴⁾

麻生磯次は、明治29年7月21日千葉県武射郡陸岡村戸田（現：山武市）の豪農・麻生源太郎・たみ夫婦の三男に生まれた。千葉県立成東中学校卒、一高1年次は北寮3番室で相良徳三や金田一他人と同室（【222】）。大学では内山貞三郎（【別表V-3】²⁹）や阿部孝らとともに国文科に進み、卒業後は六高教授、京城帝大教授から、昭和17年一高教授、戦後の昭和23年旧制一高最後の校長となる。昭和32年東大定年退官後は学習院大学教授、昭和41年学習院院長。⁽¹⁰⁵⁾

（イ） 福本和夫

【241】 福本和夫は、明治27年7月4日鳥取県東伯郡下北条村字田井の富農・福本信蔵・もん夫婦の三男に生まれた。北条尋常高等小学校から倉吉中学校を経て、一高1年次は嘉治隆一・成田広美・太田（泉山）三六と同室（東寮第7番室）。⁽¹⁰⁶⁾

大正9年東京帝大法学部政治学科卒業後は新設の松江高等学校（現：島根大学）教授、大正11～13年留学の後、大正14年山口高等商業学校（現：山口大学）教授となるも翌15年辞職して上京、本郷・菊坂台上の菊富士ホテルに止宿しコミュニス

(104) 福本和夫『福本和夫自伝Ⅰ革命は楽しからずや——回顧録・霧笛編』（こぶし書房、平成15年）52頁。

(105) 麻生磯次『私の履歴書・第33集』（日本経済新聞社、昭和43年）7頁……〔所収〕麻生磯次『喜寿回顧——教員生活五十年』（明治書院、昭和49年）2頁、麻生磯次『喜寿以後』（麻生春子、昭和55年）巻末「年譜及び著作目録」。

(106) 嘉治によれば、「同君〔福本〕は非常に先輩や有名人などの消息とか人事などに詳しい人で、勉強家であったが、孤立的な所があった」。嘉治隆一「万年野党」『わかき日の素描（私の学生の頃・第3集）』（学生書房、昭和23年）128頁。

一方、福本の長女・逸子によれば、一高時代の福本と「巖山政道さんなどは、会をもたれていたようです。一高時代の寮の同室、東寮7番工科1番だったのが外山修之さん。名古屋大学の工学博士とかで、父とは学生のとき親しかったようです。外山さんとは、晩年は親密でなくなったみたいです。あと同期の独法に神田襄太郎（【別表V-3】³⁷）さんがいます。外交官をやめてからも父に会いに来られていました。同室の独法が嘉治隆一（⑦）さんで『朝日新聞』の論説委員をやったかたです。千葉にいた時なんかは、千葉大学の伊藤教授とも親しくしていました。鹿島守之助さんなども同級生で〔鹿島の旧姓は永富、三高から東大法学部政治学科で福本と同期、卒業後は外交官となり、昭和2年鹿島精一の長女・卯女と結婚して鹿島組の総帥となる〕、一度だけ社長室に行ったことがあったようです。太田三六（泉山三六）が同室だったので、『ご馳走するから出てこい』といわれていったようです。でも父と考え方も違うし、たぶん相手も父の話を一方的に聞くだけだったのでしょう。福本逸子「父・福本和夫とともに生きて」福本和夫『福本和夫自伝Ⅱ革命運動家裸像——非合法時代の思い出』（こぶし書房、平成16年）254-255頁。

ト・ビューローに加わる。「福本イズム」と呼ばれた彼の理論は、一時は一世を風靡したが、昭和2年コミンテルン「27年テーゼ」で批判され失脚、翌昭和3年には三・一五事件に連座して検挙され、昭和17年まで14年に及ぶ獄中生活の中で「日本ルネッサンス史論」の着想を得て、出獄後は柳田国男に師事。

【242】彼の長男・福本邦雄は、福本イズムの信奉者であった水野成夫が保証人となって昭和26年産経新聞社に入社、昭和34年水野より第2次岸信介内閣改造後の官房長官・椎名悦三郎の秘書官になるよう命じられるが、これを知った父・和夫は「反動内閣への入閣反対」という電報を水野に打ったという⁽¹⁰⁷⁾。福本邦雄の名前は、後記60年安保闘争での樺美智子圧死事件関連で、再び登場するであろう。

エ 第一部乙類（英文科——三之組）

【243】第一部乙類（英文科＝三之組）に関しては、三木清・相良徳三・阿部孝・本荘可宗が、すでに登場済である。

（ア）三木清

【244】三木清は、明治30年1月5日兵庫県揖保郡平井村之内小神村の富農・三木栄吉（のち清助に改名）⁽¹⁰⁸⁾・しん夫婦の長男に生まれた。平井尋常小学校から竜野中学を経て一高に入学、一時剣道部に籍を置いたが、1年2学期始めにボート部に入部⁽¹⁰⁹⁾、宗教に関心を抱き、「私の最も親しくするやうになった宮島鋭夫〔1年次岸信介と北寮10番室で同室。【222】〕に誘はれて、或る夏私は彼と一緒に鎌倉の円覚寺の一庵に宿り、座禅をしたこともある」⁽¹¹⁰⁾。

京都帝大時代の明治38年には、詩を作っては谷川徹三に批評を仰ぎ、夏休みには上京して相良徳三と自炊生活をしている。大正11～14年岩波茂雄の援助でドイツ留学、帰朝後の大正15年西谷啓治・戸坂潤・戸田三郎・樺俊雄（樺美智子の父）・梯明秀らを相手にアリストテレス『形而上学』の講読会をもつ。同年には三高講師となるも、京都帝大教授の途が潰えたため、昭和2年4月上京して法政大学教授に

(107) 清水多吉「柳田国男の承継者・福本和夫——「コトバ」を追い求めた知られざる師弟の交友抄」（ミネルヴァ書房、平成26年）70-71頁。

(108) ①『三木清著作集（第16巻）』（岩波書店、昭和26年）579頁「年譜」、②『三木清全集（第19巻）』（岩波書店、昭和43年）851頁「年譜」、③『三木清全集（第20巻）』（岩波書店、昭和61年）311頁「年譜」。

(109) 三木清「友情——向陵生活回顧の一節」前掲注（108）②32頁。

(110) 三木清「読書遍歴」前掲注（73）28頁……〔所収〕①167頁、②385頁、③28頁。

就任。止宿先は前年末まで福本和夫が住んでいた本郷・菊富士ホテル⁽¹¹¹⁾で、同年6月以降発表された唯物史観に関する研究成果は、福本イズムの人気への対抗意識ともいわれる。

（イ） 本荘可宗

【245】 藻岩豊平『一高魂物語』（沢藤出版部、大正12年）の著者・本荘可宗は、明治24年11月8日東京生まれだが、幼少期を過ごした札幌の藻岩山と豊平川を筆名に用いる。私立商工中（現：日大三高）卒。なお、上記書籍のまえがきには「西寮の18番室にゐた同室の友を記念するためにも之は書かれたことを附記して置く」とあるが、『寄宿寮生名簿』の部屋割りでは、西寮第11番室甲で長崎惣之助（〔別表V-3〕⑳）や小田切豊秋（岸信介と中学同窓。【214】）と同室。1年を留年した後退学し、大正4年9月以降は東京帝大文科大学哲学科選科に在籍⁽¹¹²⁾。

オ 1年1学期の行事

【246】 我妻らの1年1学期（大正3年9～12月）には――、

10月20日（火）～22日（木）――発火演習（銚子）

11月1日（日）――駒場運動会

11月7日（土）――第1学期全寮茶話会（嚶鳴堂）

11月12日（木）――青島陥落祝捷会（兼・全寮晩餐会）

――等の行事があったが、我妻栄に言及した資料は、目下のところ発見できていない。

なお、我妻栄と金田一人は、弁論部のほか、弓道部にも入部したが、以下の我妻の回想は、2～3年次に進級してからの出来事であろう。

その〔スポーツの〕うち最も熱心に正式にやったものは一高時代の弓術だった。これは一高の選手として一通りの型ができた。当時インター・ハイというものもなかった

(111) 羽根田武夫『鬼の宿帖』（文化出版局、昭和52年）179頁、近藤富枝『本郷菊富士ホテル』（中公文庫、昭和58年）173頁、竹田信明『〈個室〉と〈まなざし〉――菊富士ホテルから見る「大正」空間』（講談社選書メチエ、平成7年）29頁。前身「菊富士楼」は学生相手の下宿屋で、牧野英一も法科大学生時代に止宿していた。羽根田武夫・前掲32頁。

(112) 一高中退→東大選科在籍は、岩波茂雄と同様のキャリアである。なお、日本近代文学館（編）『日本近代文学大事典（第3巻）』（講談社、昭和52年）209頁、『20世紀日本人名事典（そ～わ）』（日外アソシエーツ、平成16年）2265頁には「札幌農大卒」とあるが、彼が札幌の東北帝国大学農科大学（明治40年～大正7年）ないし北海道帝国大学（大正7年～）に学んだ記録はない。

たし、対三高戦もなかったので、これに関する華々しい記録のないのは遺憾千万だが、高商、美術学校その他の大会で相当メダルをかせいだ。殊に明大の大会で金的を射落としてメリヤスのシャツを貰ったのががやかしい憶い出だ。⁽¹¹³⁾

(2) 1年2学期(大正4年1月8日～3月31日)

【247】目下手許にある資料の限りでは、同学期中の我妻の動静も不明である。

なお、例年3月1日に挙行される記念祭は、一高最大の行事であるが、大正4年3月は明治天皇の諒闇中であったため、3月1日には記念式のみが行われ、第25回記念祭は諒闇明けの3学期——4月20日(火)に挙行された。⁽¹¹⁴⁾

(3) 1年3学期(大正4年4月8日～7月10日)

【248】1年次の記念祭に関する我妻関係の記事も発見できていないが、一方、4月30日(金)に隅田川で開催された組選は、おそらく一高時代最大の屈辱的な思い出として我妻の胸に刻まれただろう。

この件に関しては、成富信夫〔別表V-3〕⁽¹¹⁵⁾⑬が繰り返し語っているが——、

ボート・レースの組選に独法が勝った。それまでは人数が倍もある英法が勝つのが普通であったが、われわれの組には屈強な男が多かったので独法が勝った。喜んだわれわれは、その祝捷会に独法の仲間で2組のチームを作って競漕しようということになった。私が一つの組を作って整調を漕ぐことになって、他の組のメンバーを見ると皆大男ばかりをそろえている。私の組は小男揃いだ。これでは敗けると思って、田代〔重徳。⑬〕君に入って5番を漕いでくれと頼んだら彼は心よく承知してくれた。そしてわれわれの組が勝った。ところが、彼はお前のように整調がピッチをあげて漕いでは他の男はついて行けぬ、オレの強力でヘトヘトだよといってこぼしていた。全

(113) 我妻栄「私の趣味と娯楽」前掲Ⅳ注(34)330-331頁。さらに「弓は大学時代も少しはやった。足関節を病んで総てのスポーツができなくなってからも、石神井の自宅の庭の藪を切つて的場をつくり、足にさわらないようにして引いたこともある。その後本学弓術部長をしばらくやっていたので、その肩書に対して人前で引く心臓は持たせなかつたが、よく仕事を持って出掛けた湯河原や熱海の温泉の大弓場でこっそり引いたこともある」。

(114) 読売新聞大正4年2月23日朝刊3面「向陵より」、同4月24日朝刊5面「自治寮建てて二十有五年 記念祭は二十五日」、同4月26日朝刊5面「自治灯輝く五々の春 一高記念祭」、東京朝日新聞大正4年4月26日朝刊5面「昨日挙行の一高祭群衆と余興」参照。

(115) 成富信夫「田代君の思い出」『田代重徳追憶録』〔別表V-3〕⑬96-97頁。成富信夫「我妻君の人となり」前掲Ⅰ注(37)「特集：我妻法学の足跡」135頁……〔所収〕成富信夫「大切な男を失って」『追想の我妻栄——険しく遠い道』前掲Ⅰ注(62)33頁も参照。

く田代の力漕のおかげで勝ったのだナーといいながらボートから上がると、墨堤上の観客は大笑いでわれわれを迎えてくれて、こんな面白い競艇はめったに見られないと騒いでいるのだ。その話を聞くと、われわれの力漕で勝ったのではなくて、相手のボートの大男組の力漕の方が勿論早かったのだが、コックスが真直ぐに舵を引かないで左右に曲げるから、舟はジグザグに進行して負けたのだというのである。その舵手は、山形の米沢中学を出てボートにはこの時初めて乗ったという我妻が、相つとめたためだとの珍談である。

——成富の追懐談には、記憶違いの部分もあるようで、大鐘義人（〔別表V-3〕^⑭）⁽¹¹⁶⁾の当日の日記によれば、正確な事実関係は、次のようなものである。

雄図は遂に空しくなった万事は已に休した。今月今日オールとして始めて敗北の味を占めた。惨である今となってレース前の予想や張りつめた練習の様を思ひ見ると茫々として夢の如しだ。

今日のレースはこうであった。英法が1のコースで青葉独法が2のコースで紅葉仏法が3のコース文科が4のコースであった、始めスタートを少し出た所で俺はオソイピッチを引いたけれどそれでも英法を抜いてみた。文科は相変わらず早く出て一艇身ばかり皆の舟よりも先に出てみたであらう。然しそれは問題にならない。仏法が文科の次で半艇身俺のボートより先に出てみた、コースが長くなった為め、渡し場でもピッチを上げなかったが此時已に仏法のボートを抜き出して来た、然し仏法のボートとだんだん接近して来た、然し仏法もこっちも舵を引いた。そして洗ひ場で1本か2本ピッチを上げて仏法の艇を抜いた。そして半艇身許り抜いてあとはもう文科のヘナヘナばかりだと思った時、急に又独仏法の舟と接近し出してアハヤといふ間にドシンとファウルしてしまった万事はそれ迄であった。そして英法が勝った。残念でこれ程残念なことはなかったが最早仕方がない。我妻が声を放って慟哭した、不馴な彼を引き出して舵を取らせたのだから気の毒の至りであった。

この件に関して、後年我妻は「ボートは一高で組選レースの舵を引いた。もっともこれはファウルをして今だに申訳がないと思っているが⁽¹¹⁷⁾」と追懐しているけれども、これは長い月日の経過によって心の傷が癒やされたからで、組選の翌日5月

(116) 『義人遺稿』〔別表V-3〕^⑭166-167頁。

(117) 我妻栄「私の趣味と娯楽」『民法と五十年・その3——随想拾遺（下）』前掲Ⅱ注（39）330頁。

1日(土)の大鐘の日記には次のようにある。「今日は朝から我妻が学校を休んだから訪れて見たら元気を亡⁽¹¹⁸⁾てみた」。

【249】なお、我妻の運動神経については、彼の名誉のために、中川善之助が語るドイツ留学時(大正13~14年)のエピソードを紹介しておく⁽¹¹⁹⁾。

一緒にフランクフルトへ旅行したとき、駅前の、たしかオイローベイシエル・ホーフというホテルへ泊ったとき、空いているのはそのホテルで一番デラックスの部屋だけだといわれ、それでもいいからと入った部屋が素晴らしく立派な部屋だったので。広さも広いし、床には立派な赤いカーペットが敷いてありました。我妻君はすごく喜んで、その厚いカーペットの上を逆立ちして歩いたのです。我妻君が逆立ちの名人だということを知っている者はあまりいないでしょうが、私は妙な行きがかりで彼の妙技をじかに見ることになったわけです。彼は悠々と広いカーペットの部屋を逆立ちのまま縦横に歩き回りました。

2 高校2年(大正4年9月~5年7月:18~19歳)

【250】我妻の2年次・3年次の寄宿寮生名簿は入手できていないが、2年生以降の部屋割りはクラス単位で集まるので、同級生の回顧録などから同室者を割り出すことができる。我妻に関しては、伊藤武雄〔別表V-3〕^{③〇}の文章中に、次のようにある⁽¹²⁰⁾。

2年級になって、室わりは、独法クラスの間で組まれる。われわれ東京〔東寮〕12番(甲)に集った面々は、我妻〔栄。別表V-3〕^①、安孫子〔理兵衛。③⑧〕、嘉治隆一〔⑦〕、河西⁽¹²¹⁾太郎、清田岩夫〔⑩〕、内山貞三郎〔⑳〕、私〔伊藤武雄。③〇〕という顔ぶれではなかったかと思う。一高流の作風のなかで、各室の流儀がある。この室には特別な一高オンチ⁽¹²²⁾はいなくて、平凡な寧ろ端正型だったかも知れない。酒を愛

(118) 『義人遺稿』〔別表V-3〕^④167頁。

(119) 「(座談会)人間・我妻栄を語る」前掲I注(37)72頁〔中川善之助〕。

(120) 伊藤武雄「57年の歳月をたどって」前掲注(45)179-180頁。

(121) 〔七戸注〕河西太郎は、明治28年3月(日不明)大阪府和泉市松尾寺町に河西次郎の四男として生まれた。大阪府立堺中学校から、一高丙類には大正2年に入学したが、2年次を留年したため大正4年2年に進級した我妻たちと同級生になる(〔224〕)。東京帝大では政治学科に進学し、新人会の結成に参加、卒業後は大原社会問題研究所助手を経て、大正12年より立教大学に奉職。

(122) 〔七戸注〕「オンチ」は「元来は音痴の意にて調子っぱづれの声を出すをいひしものなるが、

した安孫子や河西たちは、おでん屋（本郷通りの「のんき」は、その頃の開業で、代々の一高生と長く深い馴染みを重ねていった）からの帰り、旧室会、同室舎〔会〕の集り——春木町と切通にあった、一高生御用の鋤焼店（その頃の最も安い会食料理）「江知勝」——の帰り途、本郷通りから構内まで、蜜声寮歌が歌いつづけられた。その一方で、安孫子、河西、我妻たちは、弁論部に入って、図書館での読書と思索の時間を多くもつようになっていた。

なお、同室者のうち、嘉治・我妻・河西・伊藤らは、ゴムマリ野球のチームを組んでいた⁽¹²³⁾という。

【251】一方、岸信介に関していえば、「私は2年の初めから母や良子を⁽¹²⁴⁾上京せしめ代々木に居を構え、良子は実践女学校に通い、私も寮を出てそこから通学すること⁽¹²⁵⁾にした」。

（1） 2年1学期（大正4年9月11日～12月24日）

【252】大鐘義人（2年次は東寮第2番室）の日記には、9月「20日〔月〕／夕方7時から中堅会を開いた。三輪〔寿壮。別表V-3〕③君がやって中島〔寅之助。②〕が朗読した。8時頃から服装検査に廻った。済んだら9時頃だった」とある。⁽¹²⁶⁾「中堅会は6つの寮の一つずつあったが、これも伝統的に2年生のあるクラスがこれ

今は全く、馬鹿、低能児の意に用ふ」（弥生ヶ岡草人『向陵生活』前掲注（31）164頁）。たとえば「全寮オンチ」＝「全寮随一の頭の悪い人」など（167頁）。

- (123) 「ゴムマリ野球が盛で、私はよく我妻、河西、伊藤などの級友と組んで、他のクラスの人々と戦った。私たちのチームは仲々強かったが、中学時代に遊撃であった私はいつの間にか捕手をやらされたりした。1年下にいた野尻清彦君（今の太田次郎氏）なども大のゴムマリファンであったと思う」。嘉治隆一・前掲注（106）130頁。なお、【220】も参照。足が不自由になる前の我妻が教員野球で「シユアなバッターでした。ファーストを守っておられたように思いますが、ファーストとしてもなかなか名手だったのです」というのも（『座談会』人間・我妻栄を語る）前掲Ⅰ注（37）72頁〔田中二郎〕、一高時代のゴムマリ野球の経験の賜物なのだろう。一方、「野尻はその名清彦のように清潔な感じの背の高い美青年であったが、その当時はやっていた糸鞠マッ치의選手でよく投手をやっていた。今日の軟式野球のスポンジ・ボールが生まれる前ぶれであった。昨年、後楽園球場で、里見弾が古希、大仏次郎が還暦の祝賀の文芸春秋主催の文壇人野球大会があり、里見組は桃太郎チーム、大仏組は金太郎チームで、大仏はその投手を勤めて快勝したが、その腕前の源泉は遠く40年もむかし、一高時代の糸鞠マッちに発しているわけである」。『私の履歴書・第7集』（日本経済新聞社、昭和34年）田崎勇三」58頁。
- (124) 〔七戸注〕「良子」とは、実父・佐藤秀助の兄・岸信政とその妻・千代の間の長女で、信介の許嫁（信介より5歳年下の明治34年2月生まれ）。「母」は良子の母・千代で、岸信政の死去（明治44年12月28日没）により、信介は山口中学3年生の時に岸家を継いでいた。
- (125) 岸信介・前掲Ⅲ注（133）①『我が青春』129頁。
- (126) 『義人遺稿』別表V-3 ⑭174頁。

を担当し、寮ごとにおのおの何番室ときまっていた。東寮では2番室がこれに当たった。この室は独法2年生の、スポーツをやった14、5名の連中の自修室であった。この東寮2番の中堅会長の選出はすでに1年の3学期になされている。すなわち、東寮2番では、三輪が衆議一決でその会長に選ばれた⁽¹²⁷⁾。

【253】一方、我妻に関しては、吉野作造の日記・大正4年10月1日（金）の面会記録に、次のような記載がある。「藤山逸男君、鈴木毅君、小林長蔵君、千葉律之君、鈴木某君、加藤泰君、我妻栄君、横井直興君松田元治君山田君」⁽¹²⁸⁾。

このうち「藤山逸男」とは、東大生（経済学科4年）の藤山一雄（五高出身）であろうか。「鈴木毅」は同じく経済学科の1年生（二高出身）、「小林長蔵」は独法科1年生（二高出身）、「千葉律之」は独法科3年生（二高出身）、「横井直興」は政治学科3年生（横井小楠の嫡孫。一高出身）であり、「我妻栄」が同姓同名の別人でないとすれば、一高2年の彼と、他の訪問者の間の繋がりは見出せない⁽¹²⁹⁾。

（2） 2年2学期（大正5年1月8日～3月31日）

【254】翌大正5年の大鐘義人の日記・2月24日（木）条には、次のような記載がある⁽¹³¹⁾。

2時に学校を了へてふらりと寮を出た。柴田〔健太郎。〔別表V-3〕②〕、我妻〔栄。①〕、鍛冶〔隆一。⑦〕との連中と風呂へ行かうと思つて。岡野の横に行かうかなんて云つてゐる内につい足がすべつて天気にかかせて湯島の風呂屋まで行った。風呂から出て近所できしめんを喰ふ、そして一旦学校の裏まで引かへして来たがそれから又散歩しようなんて云ひ出してぶらぶら阪を下りて上野に行った、上野を横断して広小路に出てぶらぶら歩いてゐたら須田町迄来てしまった、もうこうなると思つた学校の方に足は向かない。日本橋の方に足が向いてしまった、3人が魚河岸でスシを食う間俺は見てゐた、一度先学期の末にこゝのスシにあつてからは食はぬことに定めたか

(127) 『三輪寿社の生涯』〔別表V-3〕③134頁〔赤司卓治〕。

(128) 『吉野作造選集14日記2（大正4～14）』（岩波書店、平成8年）39頁。

(129) 彼と同姓同名の人物に関して、我妻栄「（身辺雑記）同姓同名」ジュリスト269号（昭和38年）49頁……〔所収〕『民法と五十年・その3——随想拾遺（下）』前掲Ⅱ注（39）351頁。

(130) なお、その後の吉野日記には、同年11月21日（日）条に「弁論部委員諸氏來集 次回の演説につき相談す」とあり（吉野作造・前掲注（128）46頁）、11月23日（火）条に「午後3時より一高弁論部に赴き森戸君の対米雜感武富君の墨国事情を傍聴す」とあるが（47頁）、我妻の訪問が弁論部の相談であるなら、委員の円地と四松や蠟山政道も同道するのが自然である。

(131) 『義人遺稿』〔別表V-3〕④180-181頁。

ら。もう全くいつの間にやら夜になってゐた、明るく陽気に灯のついた町を久し振りに物めづらしく感じつゝ、ぶらぶら歩いて行くと方々の陳列棚に美しい美しい罐が飾つてある女の子の遊は美しいものだと感じた、とうとう銀座に出てしまった、新橋に出た、こゝで博品館を通りぬけて又同じ道を引き返した、スシを食はぬ俺には大分腹がへって来た。皆つかれながらブラブラ歩いて日本橋まで流れて来た。茲で丸花に入ってネギマを食った始めて入ったのである。又歩いた、須田町に出る、左に曲って神田を歩いた。パウリスタに入ってコーヒをのみ菓子を食って、そこからとうとう寮まで歩いて帰ったら10時だった、どだい無鉄砲に歩いたものだと自分ながら感心である。

〔255〕 一方、赤司卓治は、我妻の次のような言を書き留めている。⁽¹³²⁾

三輪〔寿社〕がいつから思想上に大きな変化を来したか、これは時折僕〔我妻〕も考えてみるがどうもわからない。一つにはそれほど深く左様な問題について語り合ったことがないのにもよるが、思い出せることがない。一高の寮ではたびたび討論会が催おされた。ある時、「軍国主義是か非か」の題でみんなで議論した記憶がある。その時はもちろん僕〔我妻〕は軍国主義賛成の主張を述べた。他の大部分の人々と同じように三輪も賛成した。もちろん軍国主義といっても、漠然と国家主義、対外強硬政策を意味する程度のものであり、武力を背景として国内政治を行ったり、外国を侵略する、いわゆる軍国主義ではない。当時の情勢なかで、国家の防衛や発展に軍備を必要とすると考え、それを軍国主義といていた。これは一高時代のことだ。大学に入った〔大正〕6年頃から社会がはげしく動いたわけだ。

我妻の言葉にある「軍国主義是か非か」の討論会とは、大正5年2月25日に弁論部が主催した「将来我国は軍国主義を執る可きか」の討論であろう。登壇者は一高生12名、大学生7名で、「大体に於て高等学校生の主張は『軍国主義執るべし』大学生は『軍国主義執るべからず』なりき」であつたといふ。⁽¹³³⁾

（3） 2年3学期（大正5年4月8日～7月10日）

〔256〕 蠟山政道が我妻と知り合ったのも弁論部であつた。⁽¹³⁴⁾

私が我妻さんと知り合いになつたのは、一高時代ですが、科や寮が異なつていたので

(132) 『三輪寿社の生涯』〔別表V-3〕③164頁〔赤司卓治〕。

(133) 『向陵誌（第2巻）』（第一高等学校寄宿寮、昭和12年……〔復刻版〕一高同窓会、昭和59年）「弁論部部史」136-137頁。

(134) 蠟山政道「心の故郷」『追想の我妻栄——陰しく遠い道』前掲I注（63）43頁。

直ぐ知り合いになったわけではありません。我妻さんは独法で私は英法でしたが、大正4年か5年の頃、弁論部で、我妻さんが「心の故郷」という題で話をされたことがありました。そのとき我妻さんの郷里の米沢の思い出を語られながら、人間にとってふるさとの思い出というものが精神的にいかにか大切かということを描べられたのでした。

これは、大正5年4月4日（火）に開催された弁論部一高三高連合演説会における我妻の演説を指すものであろう。演題は「心の故郷」ではなく「土の心」⁽¹³⁵⁾で、演説内容は一高の校友会雑誌に掲載されている⁽¹³⁶⁾。

2、土の心

本校 我妻栄君

私の故郷は東北の山の中に文明の影響を蒙らずに横って居るが其南に吾妻山と云ふ私に印象深い山があります。此山が戦乱の巷になった維新の活劇や文明の激流が故郷を荒らした悲惨な歴史や村人の美しい姿を讃嘆する声等の中にあつていつも泰然として立って居る此山の姿を仰ぐとき私は深いインスピレーションを感じます。然かも表面かゝる泰然たる彼が清流を吐き出したり吹雪を起こしたりして絶えざる活動をするのを見る時に表面には何の変かもない様でしかも暗黒より光明へ東縛より自由へと流れて最後に震天動地の大爆発をなす吾人の内心の生命を暗示して〔い〕る様な気が致します。特に私はかの痛快な吹雪の景色を好みます。トルストイ伯の「Master and man」⁽¹³⁷⁾の中にシベリヤの吹雪の様が凄惨に描かれてあるのに共鳴しましたそれは「ワツシリイ」と云ふ主人が「ニキタ」と云ふ僕と吹雪の晩に馬を駆ってすゝんでゆくのです。貪慾な主人は商敵の表れぬうちに巨額の利益を得んとして友人の忠告も聞かずに馬を走らせましたが猛烈な吹雪の力にさまたげられて流石の駿馬も一歩も進めなくなった時に非道にも僕を雪の中にして、自分独り馬に乗って進まんとしましたがかゝる悪魔の様な行為は神の許す処ではない目標もわからずさまよって居る間いつの間にか再び同じ処に帰て来ました。其時静かに横って〔い〕る僕の神々しい顔を見て主

(135) 『向陵誌（第2巻）』前掲注（133）137頁「遠来の野球部と共に上京し来れる三高弁論部との連合演説会は〔大正5年〕4月4日嚶鳴堂に開かれたり。円地〔与四松〕委員の開会の辞に次ぎ、本校弁士吾〔我〕妻栄君は「土の心」を語りて大自然の裡其の偉大なる靈氣に触れよと論じ……」。

(136) 我妻栄「土の心」校友会雑誌257号（大正5年）「弁論部々報」「三高一高連合演説大会（4月4日、午後5時、於嚶鳴堂）」72頁。

(137) 〔七戸注〕1895年（明治28年）トルストイ67歳の時の短編「主人と下男」。

人の心には一種云ふべからざる感情がわき出で、来ました。「そして見ると世の中には金の力が如何ともする事の出来ないものがあるのかしら。金以上の力……あ、其処に神様が居られるのだあ、神様だ……」生れて始めて神様と云ふ語を叫んで僕を自分の身で蓋い包んで静かにねむったのであります。私はこれを見て自然の偉力の前には人間は一の伴も一の欺をも働く事が出来ないと云ふ事を示して居ると感じました。

あの華なギリシャ思想は絵の様な景色の中に生まれ、神秘不可解の多いアジアに千古の大宗教家が輩出したのでありますから朝夕此気高き山の霊に接し、自然の偉力の手で育てられる田舎人の思想は知らず知らずのうちに大なる影響を与へられて[i]ると信じます。

「ウオオズウォルス〔William WORDSWORTH〕」をして「田園生活に於ては人間の真情は常に自然界の最も美しき不朽の姿と相和す」と云はしめた田舎、飽くまでも純なる思想感情。これを思ふ時に私は彼の Wilhelm Scherer の *Die Naturwissenschaft ziet als Triumpfauf auf dem Siegeswagen einher, an den wir alle gefesselt sind*〔われわれを輓に繋いだ凱旋車の上に、自然科学が覇者としてふんぞり返る〕と云ふ言葉⁽¹³⁸⁾に対しても私は一言「Aber die Landgewohner sind nicht gefesselt. [だが田舎人は輓に繋がれていない]」と叫びたいのであります。

私は田舎人の自然より受ける影響が最も大なるものは自然の偉大なる靈氣にふれて其無限の力に己れの弱き力を巧みに融和する処にある即ち一方に於ては鉄の如き腕と一本の鋤とを頼として飽くまでも現世の為に独立独歩の着実なる奮闘をなししかも一方に於てははかなき人間の力の極る処と知って大なる自然の力に其身を托し安心立命を得る処にあると信じます。

思ふに人は土に生まれ土に帰る旅人でありますからこの土即ち自然の霊に感じ其力を理解して其上に立たねばならぬものではなからうか。

勿論、私は中古の暗黒時代の様に自然の前に絶対に服従せよと申すではありません。来世を唯一の楽として暮らした彼の悲観的蒙昧な時代は私の云ふ処の思想とは比す

(138) [七戸注] ヴィルヘルム・シェーラー (1841-1886) ——は、オーストリア出身のゲルマニストで、ドイツ文学を民俗学や文献学から独立した学問領域として確立させた功労者、ゲーテやグリの研究家として知られる。我妻の引用の出典は、Wilhelm SCHERER, *Die neue Generation. In: Wilhelm SCHERER, Vorträge und Ausätze zur Geschichte des geistigen Lebens in Deutschland und Österreich*, Berlin: Weidmann, 1874, S. 411である。

る事も出来ないのみならず彼等が現世が仮の世であると見た時に吾人の土に対する使命を忘れて居るのであります。私の申しますのは神にも憧れよ。高遠な理想も追ふべしアインビルデUNGスクラフト〔Einbildungskraft（想像力）〕をして自由に高翔せしむるも可なり唯其根底に於て「自然の偉力に融和せよ。土を忘るゝ勿れ」と云ふ一貫せるフアウンデーシヨンの上に立たしむべしと主張するのであります。

18世紀に於てローマン主義の感情にばかり走って理性をしりぞけ非内容的なものとなったのも此根底を忘れたからであります。

青年が懐疑的思想に傾き沈滞煩悶する時此根底の上に立たしめたならば幾分防ぐ事が出来ると信じます。

又政治家の議論の国家を益する事なき空論に終る時彼等は政治を為す対象は土より外にない事を忘るゝからであります。我が土の心なるものは現世に対する理解が根底となって居るから非内容的なるローマン主義にも傾かず又此大なる靈に憧憬する点に於て殺風景な唯物感にも陥らないのであります。しからばこゝに靈肉一致の面影があるのではなからうか、イブセンの所謂第三帝国と軌を同一にするものではなからうか……私はひそかに信ずる次第であります。

【257】 この連合演説会から3週間後の4月28日（金）に第二大教場で行われた弁論部の練習会——安孫子理兵衛「私の驚きと悲み」、我妻栄「雲井龍雄を懐ふ」——については、すでに触れた（【209】）。

さらに、その翌月（5月）30日（火）に第二大教場で行われた研究会でも、我妻は「勝たん哉」との題で演説を行っているが、内容については不明。なお、「弁論部部報」には、登壇者の演説の「終つてより梅月に集り互ひに演説の内容、形式を批評し合つて研究した、高談縦横時の経つを覚え、近來稀に見る盛会であつた、会する者十余名、11時散会」⁽¹³⁹⁾とある。

3 高校3年（大正5年9月～6年7月：19～20歳）

【258】 その後、我妻らが進級した3年次四之組には、留年組の長沢里治と成瀬正隆（兩人とも早稲田中学出身）が加わる。後のシューベルト会（【227】②）メンバー

(139) 校友会雑誌259号（大正5年）「弁論部部報」66頁。

である長沢は大正元年入学だが、3年生を2回目の原級留置、成瀬は大正2年入学で、3年生を1回目の原級留置だが、その後の卒業生名簿には名前がない。

（1） 3年1学期（大正5年9月11日～12月24日）

ア 末弘巖太郎

【259】 我妻らのクラスでは、「3年になると東大から末弘巖太郎さんが来られ法学通論をガーライスの書物⁽¹⁴⁰⁾に基いて教わり、相当むずかしい本だったが、我妻君は毎回講義後教壇前まで行って質問⁽¹⁴¹⁾していた」。

一方、我妻は、末弘について次のように語っている。「大正6年、第一高等学校の3年生の時に法学通論を御習いしたのが、先生から教を受けた最初でありました。授業開始時間ギリギリに、小さいお身体に大きな鞆を抱くようにかかえて一高の門を駆け込んで来られる先生の御姿を、何時も時計台の下の教室から見て居って『オイ、ガンチャンが来たよ』といったものです。先生の法学概論は、全く独得⁽¹⁴²⁾のものでした」。

さらに、三輪寿壯の次の言も興味深い。「負け嫌ひといへば、高等学校の法学通論の〔末弘〕先生の話としてこんなことが耳に残って居る。それは一口にいへば大学に入ったら点取争ひをやって勉強しなければならんといふ意味でした。当時学校の試験の成績が卒業後の運命を支配すること甚だ微細にわたって、何点何分何厘が人物の正札になり、従って生存競争の勝敗の分岐点⁽¹⁴³⁾がその点数だと意識されて居ました。秀才とは此愚劣なる試に没頭し得る忍耐力を有する人でなければならなかった。氏は大いにそこに負けぬ気を發揮されたまで、あった」。

イ 大鐘義人

【260】 我妻の3年次の寮室は朶寮第3番室。同室の大鐘義人の日記大正5年10月18日（水）条に「組選レースのある日だ。大抵今度は一等尻になるんだろうと見越をつけつゝ、午食を済すと直に柴田〔健太郎。〔別表V-3〕②〕、我妻〔栄。①〕、嘉治〔隆

(140) 〔七戸注〕 Karl von GAREIS, *Über die Einführung in das Studium der Rechtswissenschaft : Rede, gehalten bei Übergabe des Rectorats der Königlichen Albertus-Universität zu Königsberg i. Pr. am 15. April 1894*, J. Guttentag, Berlin, 1894.

(141) 齊藤直一「一高で知り合ってから」前掲注（84）30頁。

(142) 我妻栄「末弘巖太郎先生告別式弔詞」『民法と五十年・その2——随想拾遺（上）』前掲Ⅱ注（87）301頁。

(143) 三輪寿壯「末弘巖太郎博士」〔別表V-3〕③71頁。

一。⑦) と共に寮を出た。組選は5時頃行はれた⁽¹⁴⁴⁾とあるように、他の同室者は、柴田・嘉治らである。

【261】 彼ら同室者が挙行した大正5年10月30日(月)～11月3日(金)富士五湖から箱根を越えて小田原に至る徒歩旅行について、大鐘は「富士裾野巡りの記」と題する紀行文を遺しており、11月1日(水)条には、雨の中、道が行き止まりになり「後に帰って行き直すのも面倒だと思って2間ばかり下の道に飛び降りたら丁度我妻の傘の上に尻もちをついて可惜傘が無惨な有様となった」「夜我妻と三輪は例の如く碁を打つけれ共俺等は所在なさに閉口した」などがある。

【262】 その後、学期末試験を控えた12月12日(火)より発熱した大鐘の日記は12月19日(火)で途絶え、翌20日(水)父親に宛てて帰郷の手紙をしたためるも、同日東京赤十字病院に入院。見舞いに行った柴田健太郎とは面会謝絶で会う機会もなく、年明けの大正6年1月5日(金)朝に死去した。病名は腸チフスであった。享年21歳。

嘉治隆一によれば、「一高3年の冬、寄宿寮で同室の友人Oが病没したので、室友一同が醸金して、故友の肖像を遺族に送りました。同室の三輪寿壮が中学時代、中村研一画伯と旧友だったという関係から、同画伯を通じ、その恩師岡田三郎助画伯に揮毫を願ったわけでした。いよいよ画が完成したという話が伝わりましたので、出来具合をアトリエへ二三の室友と拝見に上がりました⁽¹⁴⁶⁾」。

一方、彼の没後に編まれた追悼集には、柴田健太郎の追悼文のほか、我妻栄の文章も収録されている⁽¹⁴⁸⁾。情緒的・感傷的な我妻の文体の中でも、とりわけその傾向の著しい文章である。

親しい友とも分れ思出の寮とも離れて芝の一隅に蟄居しながら大学の生活なるものに圧迫せらるゝ私は君からうけた美しい気分を次第次第に失って今や君の姿を思ひ浮かべる余裕すらもなくなったのです、未来に対する打算と杞憂とでコセコセした生活ばかり送る私にとって君の愉快的男らしい生活は誠に絶好の旅伴だったのです。私は

(144) 『義人遺稿』〔別表V-3〕⑭192頁。

(145) 『義人遺稿』〔別表V-3〕⑭51頁。

(146) 嘉治隆一「岡田八千代夫人」『人物万華鏡』前掲注(95)129頁。

(147) 『義人遺稿』〔別表V-3〕⑭「追想」10頁。

(148) 我妻栄「大鐘君の霊前に」『義人遺稿』〔別表V-3〕⑭「追想」38頁。

近頃嘗て君と交はした一寸した会話を痛切に思ひ出して居ります、〔高校3年の〕2学期に暮に近づいた頃でした。その頃私は暇を得てはB、G、B、〔Bürgerliches Gesetzbuch〕を読んで居りました、例によって或夕方法律の本を抱へて図書館を出て来たら君は後からついて来て「オイお前はオンチだナ⁽¹⁴⁹⁾、大学へ行ったら法律の本しか読めないだらう何故今のうちクラシック物を読まないのか!？」と私は直ぐに「大学へ行ったら法律の本を読まなきゃならないからこそ今のうちから読み馴らして居るんぢゃないか」と答へました、そして心の中では「二人の考はこれ程異うからな!」と痛切に感じたのでした、君もおそらくはさう思ったでせう、毎日権利だ義務だと打ちつけられ詰め込まれて、しかも千人入の大講堂で悪い耳を聳てながら難い講義を聞きながら占席に憂き身をやつす今日此頃は更に痛切にこの日の会話を思出して居るのです、……〔中略〕……「それは困るさ然し他にしかたがないぢゃないかオンチだナ⁽¹⁴⁹⁾〔馬鹿だなあ〕」とはよく私の煮え切らない態度に対して君の用ゐた口吻でした。

大学生になった我妻が「難い講義を聞きながら占席に憂き身をやつす」「コセコセした生活」の中で抱いていた「未来に対する打算と杞憂」の具体的内容こそ、本連載の次回で検討されるメインテーマであるが、一方、本連載の前回までの考察との関係では、我妻の次の言が気になる。⁽¹⁵⁰⁾

君が息絶ゆるその日の朝、看護婦を呼んで「おやちに遇いたいな⁽¹⁵⁰⁾」と云ふたそうです、君が優にやさしい心根は今はの際にも父君や同胞の上に飛んで居た事でしたらう、定めし遇ひたかつた事でしたらう、死んでも死に切れない怨が残った事です、しかも君は平然たるものだった、静かに口を洗はせて君ヶ代一曲を奏して余韻長く消ゆる時君の御霊は呼べど帰らぬ国に旅立ったと云ふではありませんか、あゝあれ程まで愛し恋した父君や母君に分れる時君はどうして自若たる事を得たのですか、生死の間に泰然たる覚悟を君は何処に養ひ得たのですか、而もその最後の意識には父なく母なく同胞なく只陸下方歳の念慮に満ち満ちるとは……私には謎です

子の親に対する敬慕の情を、天皇に対する崇敬に置換させる教育勅語の思想教育は、大鐘に関しては首尾よく運んだ。しかし、我妻にしてみれば、父親に会いたいとの切実な思いを看護師に告げていた大鐘が、「君が代」を口ずさんで死んだこと

(149) 〔七戸注〕「馬鹿だなあ」の一高用語。前掲注(122)参照。

(150) 我妻栄「大鐘君の霊前に」前掲注(148)42頁。

に、得心がゆかないのである（【141】①参照）。

ウ 金田一他人

【263】一方、金田一他人の不幸の物語は、大鐘義人が死去した大正6年1月5日と相前後して幕開けとなる。我妻らの追悼文には「金田一君がS——家と相知る様になったのは、大正6年、恰も高等学校を卒業する年の正月のことで兼て同家へ出入して居た友人に連れられて行ったことに始まる⁽¹⁵¹⁾」。本荘可宗（【245】）の文章を引用すれば、それは「その年の正月××日〔冬期休暇中=1月7日（日）以前〕の夜、富豪鈴木寅彦氏の広壮なる邸宅に開かれた歌留多会⁽¹⁵²⁾」であった。

- ① 鈴木寅彦氏はF——県〔福島県〕出の代議士で、同地方の名望家であったまた現に日清生命、成田鉄道の両重役を兼ねて、その手腕力量共に衆人の推す所となつてゐた。その家庭は頗る放任的で、善く云へば進歩した開放的な家庭であつて、書生の出入、令嬢の交際なども極めて自由であつた。
- ② 大正6年1月××日の夜、鈴木家の長女隆子嬢（現25歳）〔当時20歳〕の招きによつて、例年の通り歌留多会は催された。……其夜は隆子の朋輩を始め、克子（鈴木氏の次女）のお友達の女性を中心に、それに当日の客賓として待たれたのは一高の健児、早稲田、慶応、明治の学生達、総て十余名の男性であつた。此若い男女二十余名を織り交せて自由の空気の中に催された歌留多会が、いかに彼等青春の血を湧き立たせたかは想像するまでもあるまい。
- ③ 偶々彼が当日来賓中から鈴木家に撰ばれるために、彼にとって甚だ好都合にも引立役となつて顕はれ出たものがあつた。其れは当日矢張一所〔一緒〕に招ばれた一高端艇部の選手の一部6、7人の若者達であつた。彼等猛者連はボート遠漕で帰京して間もなく、その顔は^{あかがね}赭銅色に輝いて、腕には未だオールの叫鳴りが残つてゐた。冬期休課で空虚になつてゐる寮に残つて、魔の如き向ヶ岡の夜のなかに寢室西寮18番で風な

(151) 我妻栄＝木村清司＝岸信介＝森喬「逝ける友を偲びて」『身も魂も』【1】239-240頁。

なお、『三輪寿壯の生涯』【別表V-3】③146頁〔赤司卓治〕には、次のような記述がある。「その頃、S家という上流家庭に奇麗な2人の娘がいた。その母親はとりわけ一高びいきの婦人で、一高生を自分の家に招待してご馳走したり、トランプその他の遊びをさせて、娘のボーイフレンドにし、将来のことまで考えていたようである。多くのスポーツマンや才人たちがよくS家へ出入したが、三輪もまたそのグループに混つたこともある。

(152) 藻岩豊平「現代文明の犠牲者・大正の藤村操／帝大秀才金田一他人の自殺」前掲Ⅳ注（73）2頁。以下、①2頁、②3頁、③11-12頁、④14頁。

ど潰して無聊に悩んでゐるよりはといふので、その招待に応じたのであった。蛮骨稜々、弊衣破帽の姿に赭銅色の顔して、鈴木邸の華やかな享楽の広間にのさばり出たのである。昔、関東の野武士が大官人の中に伍したよりか猶ほ激しい場所錯誤であった。体格に於いて、度肝に於いて金田一は彼等の傍によれば全く半分にも足らぬ、情けない貧弱漢であったけれど、娘達の眼にとっては好個の優男として映じたのであった。羸弱の蒼白も、其処では恥ではなくて、一個の貴公子然として輝いたことであつた。

- ④ 折角の出馬も空しく金田一輩の引立役にしかならなかつた選手連の一同は忌々しく舌打ちをして、1時間計りでもう帰らうと云ひ出した。選手のなかの1人榊井雅生〔仏法文2年〕は、腹癒せに座にあつたおすしを悉く貰つて帰つて行つた。

(ア) 生い立ち

〔264〕 本荘可宗は、金田一他人の生い立ちについて、次のように記している。⁽¹⁵³⁾

彼は盛岡市の××屋といふ宿屋の子として生れた。⁽¹⁵⁴⁾ 数多い9人の兄弟姉妹のなかで彼は6番目に生れた。⁽¹⁵⁵⁾ 両親は兄が多過ぎるといふので彼を里子に遣つて了つた。⁽¹⁵⁶⁾ 彼は7歳になって生家へかへるまで自分の同胞も親も知らなかつたのであつた。彼が生家へかへるや彼の兄弟姉妹は物珍しさうに彼を眺めてクスクス笑ひなどした。其後長いこと彼だけは除け者にされて独りで淋しく暮して来た。彼の母も亦彼に対しては余り豊かな愛は持つてゐなかつた。彼は爾うした周囲の中に、その小さい魂は温められることなく、日陰に育つ悲しみを持って伸びていった。彼はいつも独りで部屋の隅ッ子でお伽噺などを読んでゐた。彼はその生活のスタートに於いて既に或る不幸を印づけられてゐたのであつた。⁽¹⁵⁷⁾ (かうした中に少年期を過ごしたことは彼の性格を——實際は

(153) 藻岩豊平・前掲IV注(73)5-6頁。

(154) 〔七戸注〕旅館の名前は清風館で、本家の伯父・金田一勝定が、父・久米之助(勝定の末妹・ヤスの入婿)の分家の際に与えたものであつたが、久米之助は勝定から与えられた事業を次々に失敗したため、家計は常に困窮状態にあつた。藤本英夫『金田一京助』(新潮選書、平成3年)50頁。

(155) 〔七戸注〕正しくは7男4女11人の8番目・五男(明治28年7月5日生まれ)。『金田一京助先生思い出の記』前掲I注(4)409頁「金田一家系図」。

(156) 〔七戸注〕実際は「盛岡地方には、父親が42歳のときに生まれた子は親に仇をするという妙な俗信があり、そのため一応形の上だけでも親子の縁を切つた方がいいということで、『他人』という妙な名をつけられて、6歳まで里子に出された」ものである。金田一春彦『「身も魂も」——ある秀才青年の死』文芸春秋47巻4号(昭和44年4月号)261頁。なお、【2】も参照。

彼は善良な資質であるに闕はず——甚だしく利己的に狡猾に、そしてトゲトゲしくして了った。他日一高に来てから彼は寮の同室者に対して此の感じを最も強く与へたといふことである。彼はまた屢々兄弟姉妹が自分を除け者にしたこと——是は彼の幫目でもあったらう——また親が自分を里子に遣ったことを呪つてゐた。

(イ) 一高時代

【265】 一高時代の彼について、本莊可宗は、次のようにもいう。⁽¹⁵⁸⁾

一高時代に於いて、彼の評判は同窓間にあまり善くはなかつた。「彼奴は女みたくないやに甘つたるい物の云ひ方をする奴だ」とか、此方彼方の珈琲店を飲み歩いて給仕女を探し廻つてゐるとか云はれたのは勿論——また実際さうであつたが⁽¹⁵⁹⁾——彼が一層蔑まれたのはお辞儀して得々たる狡猾な心理の所有者であるとせられたからであつた。彼は女のゐる処へ出ては、最も穩かに、しかも凶々しく、甘い調子で、怪しい言葉で、色々の女に接近してゆくのであつた。当時未だ一高は衰へたといいても今日ほどではなかつたので、一高本来の精神に立つた硬骨の少年達は、彼金田一の如きは、優柔女の腐つたが如く、狡猾狐の女装せるが如く、女に媚び、従つて女の父兄に取入ること幫間の如きであつて、一高健児の面よごしである、宜敷引きづり出して、鉄拳制裁に附し、彼を男兒本来の剛正に復へしてやらねばならぬと、彼の面前に怒鳴つたことさへあつた。

このうち鉄拳制裁の件は定かではないが、周囲と衝突することがあつたのは事実のようで、彼に同情的な我妻らの文章にも、次のようにある。⁽¹⁶⁰⁾

目をつぶつて追想するのに、やっぱり彼は何処までも北方の野人であつた。生一本の荒彫りの未製品のまゝで、積極的に思ふ存分を振舞つて、色々なものにおつつかつたり、そしてありとあらゆるものに小兒のやうに全我をもつてあつて、ともすれば

(157) 〔七戸注〕金田一春彦・前掲注(156)261頁も、「両親も、その迷信の故からか、あまり可愛がらなかつたようで、特に母親は子供を偏愛するタイプの女性だったため、彼はわけもなく親の愛から遠ざけられた方らしい。そのために彼は、普通の人以上に、愛情に飢えて育つたといつてもいいだろう」とする。

(158) 藻岩豊平・前掲IV注(73)8頁。

(159) 藻岩豊平・前掲IV注(73)9頁には「彼は又、当時、久慈ながし〔久慈学。前掲注(41)〕といふ6尺余りの丈のある男(彼の中学から一高へかけての同窓生)と一所に諸所方方を呑んで歩いた」とあり、11頁には「一高時代に於いては、彼は多少デカダンの傾向を持って夜毎々々に流浪して廻つた」とある。

(160) 「逝ける友を偲びて」『身も魂も』【1】289-290頁。

他を顧る遑がなかった。凡ての長所も凡ての短所〔所〕も其処に包蔵されてゐたのである。その狭い家庭の裡から放たれて、始めて一高の寮生活に、見も及ばなかった未知の世界の開けた時には、丁度籠から出た小鳥のやうに自由に、快活に、誰でも経験する生涯の最大幸福時代を精一杯にぶつかって行った。然しながら大勢の兄弟のある家では大抵さうであるやうに、家の中で大勢の兄弟を友として世間見ずに育った彼は、其の初めての寮生活に自由を享樂するに任せて一面随分激しく友人と衝突もし、又一面その純一さが可なり友人に愛されもした。

【266】 本莊可宗の文章は、金田一他人の人物像を、①立身出世の打算と、②愛情の渴望の二本柱で描き出そうとするものである。すなわち⁽¹⁶¹⁾——

- ① 一高における金田一は、「全く一個の『賢い』——利己的打算に鋭敏で且つ巧妙な青年となり了へて仕舞った。……あらゆる自分の出世の緒口となりさうなものには、機を逸せずこれを捉へ、これを利用することを忘れぬ、探偵の如き狡猾な神経の所有主となって来た」。
- ② 「里子に遣られ、生家へかへってからも除け者にされ、母親の愛も知らずに、淋しくお伽噺などを読んで、成長して来た少年」を、「鈴木家、殊に夫人は実子以上に可愛がった。……。また克子も常に兄さん兄さんと云って慕つてゐた。彼はこゝで始めて親の愛、兄弟の愛に似たものに触れたのであった。野晒しにされて冷たく荒んだ彼の心は、いま始めて情けある人に拾はれて温室に入れられ、注意深く手入れをされ、愛と親切とで温められたのであった。彼の心は初めて人生の生甲斐を感じたであらう」。

①立身出世の打算については、「未来に対する打算と杞憂」を吐露する我妻を始め、当時の一高・東大の学歴エリート全員が共有するものといえるだろう（Monsieur KANDAICHI, c'est moi）。

（2） 3年2学期（大正6年1月8日～3月31日）

ア 2月2日（金）——弁論部練習会

【267】 一方、我妻に関しては、大正6年2月2日（金）第二大教場で行われた弁論部の練習会の記事が「校友会雑誌」に掲載されている。円地と四松（「Arbeitを

(161) 藻岩豊平・前掲Ⅳ注(73) ①15頁、②20頁。

なすこと)、平野義太郎(「最初の練習会に当りて」)に続いて登壇した我妻栄の演題は「風」、記事には「安逸を貪る所、其処に低気圧起る。恐るべきにあらざるとは、蓋し我国の現状を喝破せる一大警句ならずんばあらざる也」とある。⁽¹⁶²⁾

そして、1週間後の2月10日(土)我妻は、この「風」の演題を引っさげて、早稲田大学との連合演説会に乗り込む。⁽¹⁶³⁾

イ 2月28日(水)——寄宿寮総代会

【268】なお、我妻より2級下の松坂佐一によれば、「大正6年3月1日の一高記念祭前夜の寮総代会の席上で、記念祭の当日東寮の玄関の屋根に登って騒ぐのはみともないから止めろという趣旨の演説を、東北弁で滔々とやった小男の学生がいた。それが独法3年の我妻君であることを聞かされたのが、同君を知った最初であった」。⁽¹⁶⁴⁾

かつて1年生の組選での大失態に号泣していた(【248】)我妻は、一高の3年間で見違えるほどたくましい青年に成長したのである。

(3) 3年3学期(大正6年4月8日~7月10日)

ア 5月——弓道部送別会

【269】『向陵誌』『弓道部部史』には、「間もなく〔大正6年〕5月の中旬となれば3年生の送別会を催す。この年、水本美鎮〔農〕、黒田鴻五〔英法〕、香田愚〔英法〕、川上良兄〔英法〕、河島正文〔英法〕、千葉泰一〔仏法〕、植村琢〔工〕、我妻栄〔独法〕、金田一健人〔他人。独法〕の諸兄を送る」とある。⁽¹⁶⁵⁾

イ 6月——丙類(独語クラス=四之組)記念写真

【270】嘉治隆一は、「その年〔大正6年〕の6月、3年にわたった寮生活を終るにあたって、みんなで記念写真をとったが、その裏に室友が寄せ書をしてくれた文句が不思議に今もなくなり残っている。そのうちの何人かの分を書きぬいて見よう。(40年たった今ごろ、本人たちの眼にふれたならば、何と感じるか、或はどこかから苦情が出るかも知れないが……。)」⁽¹⁶⁶⁾としている。以下、転記すれば——、

(162) 校友会雑誌263号(大正6年)「弁論部部報」68頁。

(163) 前掲注(162)69頁。

(164) 松坂佐一「得難い先輩」前掲I注(37)『特集：我妻法学の足跡』142-143頁。

(165) 『向陵誌(第2巻)』前掲注(133)「弓道部部史」536頁。

(166) 嘉治隆一「二水会から新人会へ」民主社会主義54・55合併号(三輪寿壯追悼特別号、昭和32年)

- 始めて君と教室に会して口をきいてから、今日こうして君の写真に筆をとるまでの年月を顧ると夢の様だ、俺の心には深い深い跡が残ってる、何年たっても幾つになっても決して忘れない、君の雄々しき人生の戦士振りを見つつ俺も進んでゆこう（我妻栄）
- 生きるとき裸であった、死ぬときも裸であれ！風雪と戦ひて育ちし草之助（長崎惣之助）
- 蚊一つに施しかねしわが身かな（中島寅之助）
- 心の奥底に生みつけられた萌芽を思ひきって大きくしたい（三輪寿壮）
- 馬与力己（田代重徳）
- Remember always Where there is nothing There is God.（河西太一郎）

——「まだあるが、省略する。写真をとった日の晩、本郷三丁目に近い江知勝で会食した。遅くなってから、訣別ストームといって全寮を廻ってから、自習室で一同徹夜で語り明した⁽¹⁶⁷⁾」。

この集合写真は『三輪寿壮の生涯』や『人間・岸信介』にも掲載されている⁽¹⁶⁸⁾。なお、三輪建二『祖父・三輪寿壮』に掲載されている我妻栄記念館所蔵の写真は⁽¹⁶⁹⁾、我妻家旧蔵のものであるが、裏面には「大正6年6月独法三年卒業記念撮影」の墨書があるだけで、寄せ書き等はないという⁽¹⁷⁰⁾。

一方、三島由紀夫旧蔵の『三輪寿壮の生涯』⁽¹⁷¹⁾には、写真の平岡梓の個所に鉛筆で線が引かれ、隣の頁（163頁）が折られているが、これを行ったのが、三島か父・平岡梓かは不明である。

82-83頁。

(167) 嘉治隆一・前掲注(166)83頁。

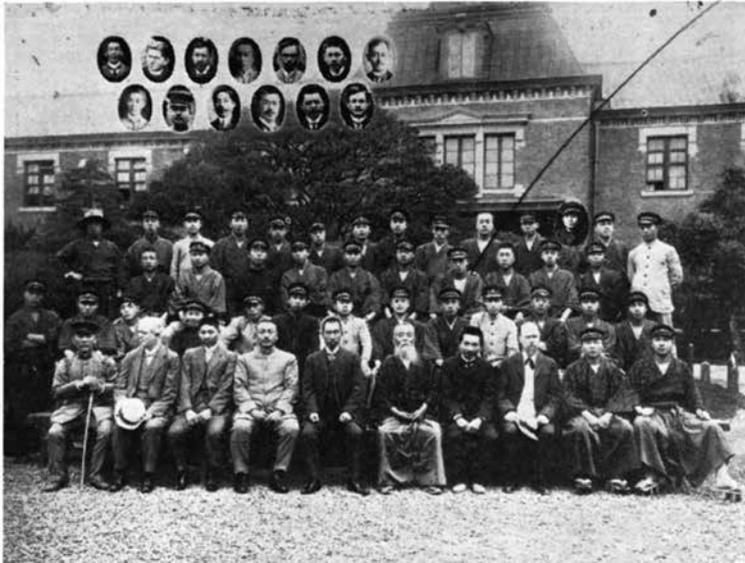
(168) 『三輪寿壮の生涯』【別表V-3】③162頁、『人間・岸信介——波乱の90年』前掲I注(104)25頁。

(169) 三輪建二『祖父・三輪寿壮』【別表V-3】③23頁。

(170) 我妻栄記念館・手塚正氏のご教示による。なお、この写真は、我妻家の軽井沢の別荘にあった可能性が高いとされる。

(171) 鳥崎博＝三島瑤子（共編）『定本・三島由紀夫書誌』（薔薇十字社、昭和47年）444頁。なお、同書誌に所載の三島由紀夫旧蔵書の中には、我妻栄の著作が1冊のみ存在しているが（465頁「我妻栄『民法と五十年——古稀を記念して』有斐閣 S42・9・30」……『民法と五十年——身辺雑記（4）』前掲I注（115）、現物は実見していない）。

三島由紀夫旧蔵『三輪寿社の生涯』162頁写真



一高大正6年独法科の卒業記念

向って左より、〔1列目〕齋藤徹男教官、クレメント先生、上村清延先生、谷山初七郎舎監、瀬戸虎記先生、塩谷時敏先生、岩元禎先生、ユンケル先生、成富信夫、石井康〔2列目〕三輪、鈴木八郎、内山貞一郎、成田広美、尾形綾亮、森喬、柴田健太郎、大熊与吉、金田一人、齋藤直一、田代重徳、長谷川恭平、我妻栄〔3列目〕安孫子理兵衛、長沢里治、秋山雄一、長崎惣之助、歌田千勝、中島寅之助、平岡梓、相川淳三、神田襄太郎、関屋悌蔵〔4列目〕伊藤武雄、岸信介、嘉治隆一、松本三千雄、江原三郎、清田岩夫、田原内蔵太郎、齋藤和三郎、重松宣雄、高原弘、赤司卓治、大鐘義人、浅野英明、河西太一郎

左上方の顔写真は在学中に教わった先生。向って左より、〔前列〕末広徹太郎、佐野正男、丸山道一、青木正、箭内互、岡田実麿〔後列〕大津康、ケール、齋藤阿具、大島正徳、速水悞、杉敏介、島田均一の諸先生

【追記】 鈴木家の人々

藻岩豊平〔本荘可宗。〔245〕〕「現代文明の犠牲者・大正の藤村操／帝大秀才金田一他人の自殺」(前掲Ⅳ注(73))は、一種の文明批評であって、大正期の新興ブルジョワである婚約者の家庭についても、金田一他人の人物像(〔206〕)①立身出世の打算と

②愛情の渴望）と対をなす形で、非常にステレオタイプな描き方をする。

これに対して、伊集院斉〔相良徳三……一高1年次に金田一他人と同室。【222】が「婦人公論」誌に掲載した「姉の復讐の材料になった男の話」（前掲注（47））は、金田一他人が、婚約者の姉と母の被害者であるかのように描いているが、この点に関しては、金田一他人の甥（金田一京助の長男）春彦の文章の中に、次のようにある。⁽¹⁷²⁾

最後に、私はこれを書くにあたって、改めて、叔父〔金田一他人〕の親友で、この事件をもっとも詳しく知っているはずの相良徳三氏を世田谷に訪ねてみた。氏は、昭和の初めごろ、伊集院斉というペンネームで、バリバリの評論家として縦横の活躍をされ、叔父の死に至るいきさつについても、昭和のはじめごろ「婦人公論」誌上に発表したことがあった。しかし、氏は、あの太平洋戦争に協力したとかで、戦後パージにあってそれっきり筆を折り、現在では、私立の大学〔成城大学〕の美術史の教授として、木立ちに囲まれた書齋で静かに暮らしておられた。

私は氏を訪ね、たまたまテレビの画面に映った機動隊対共闘派学生の安田城攻防戦〔昭和44年1月18日（土）～19日（日）のいずれの日かは不明〕をいっしょに見たあと、当時のことをいろいろ伺ってみたが、氏はほとんど忘れかけているようでもあり、また多くを語ろうとはされなかった。ただ一つ話されたことは、「婦人公論」に書いたのは個人の親友としての立場から書いたので、当然鈴木家から何らかの抗議が出るものと覚悟していたのに、なんの反応もなかったということ、そうして、その頃、鈴木氏は政友会に入って重要な地位にすわっていたが、間もなく理由もなくその地位をおりてしまった、はたして氏の書いた記事が原因だったかどうかは不明だが、相良氏にすれば、とても申しわけないことをしたと思って、それ以来あの事件については口を閉ざしてきた、ということである。

私はそれを聞いて、鈴木氏という人がまことに尊敬すべき温厚な紳士であったことを知り、あの事件で叔父にまさる深い痛手を受けたであろうと思うと、大変すまない気がした。遺族の方はどこかで暮らしておられるであろうが、心から御幸福を祈る次第である。

（1）鈴木寅彦

鈴木家の当主・鈴木寅彦は、明治6年3月23日、旧会津藩士・国井豊次郎の長

(172) 金田一春彦・前掲注（156）266頁。

男として福島県河沼郡金上村に生まれ、明治15年2月8歳で鈴木家の養子に入った。14歳で福島師範学校に進学するも中退、若松小学校の代用教員を2年勤めた後、裏磐梯山・檜原銀山の事務員を経て上京、東海散士・柴四朗の家の玄関番から18歳で上野駅の改札係となり、明治29年東京専門学校（現：早稲田大学）邦語政治科を卒業（なお、一時期日本大学にも在籍したようである）。その後入社した日本鉄道の国有化に伴う清算での手腕を認められ、日本曹達・北海道瓦斯・東京瓦斯その他多数の会社の重役を歴任した一方、明治41年福島2区より衆議院議員に立候補し当選5回。だが、常務を務める東京ワスの増資問題解決のため、東京市助役白上佑吉らに贈賄を行い、控訴審で昭和10年6月29日懲役6月執行猶予3年の有罪判決を受けた。その後昭和14年5月1日郷里・会津若松の第15代市長（東京在住の名誉市長）⁽¹⁷³⁾に迎えられ、在任中の昭和16年9月18日東京・品川の長女・隆子夫婦宅で突如胆石症を発症して死去。享年68歳。

（2）妻・志津

鈴木寅彦の妻・志津については、『人事興信録』（人事興信所）の「第3版」（明治44年）す44頁、「第4版」（大正4年）す28頁、「第5版」（大正7年）す34頁、「第6版」（大正10年）す36頁には、「明治10年10月生、大阪、土族、榊原浩逸妹」の記載がある。東京朝日新聞大正13年10月24日夕刊2面の死亡広告によれば「予て病気の処療養不相叶本日〔大正13年10月22日〕午前2時永眠致候」。

（3）長女・隆子

長女・隆子は、明治30年9月生まれ。彼女については、二女・克子とともに、後に改めて触れるであろう。

（4）長男・重成

長男・重成は、明治34年3月生まれ。『人事興信録（第12版・上）』（昭和14年）ス81頁には「東京美術〔学校?〕出身」とある。

（5）二女・克子

二女・克子は、『人事興信録（第8版）』（昭和3年）ス72頁によれば「明治38・1生、双葉高等女学校出身」、婚約者である金田一他人より9歳年下になる。なお、彼女

(173) なお、控訴審判決に対して、白上佑吉ら9名は上告したが（大判昭和11・8・5刑集15巻1309頁で上告棄却）、鈴木寅彦は上告していない。

は、平岡梓の妻・倭文重^{しづえ}（＝平岡公威〔三島由紀夫〕の母。明治38年2月18日生まれ）と、小学校の同級生であり、平岡梓『俣・三島由紀夫（没後）』（文芸春秋、昭和49年）「（両親対談）三島由紀夫は誰のものか」には、次のような夫婦の会話がある（222-223頁）。

倭文重 ……そのころ〔大正初期〕あなたはどこうろついていたんでしょ。

梓 まだ本郷の学生だったとすると、江知勝あたりで肉を喰っていたわけだ。

倭文重 江知勝の女中あたりに憧れていたんじゃないの。

梓 肉つき女性かね。肉つき女性といえね、ガス会社の社長で順天堂の近くに家があったんだが、そこに適齢期の娘がいてね……。

倭文重 知ってますよ、S・K〔鈴木克子〕さんでしょう、私と同級ですよ、誠之（小学校）で。

梓 その家で、婿さん選びかなにか知らんがさかんにわれわれを招待するんだ。こっちは江知勝でも食えないような肉を食わせるっていうんで、よく押しかけたな。たしか岸（信介）君もその仲間だ。ところが仲間のK〔金田一人〕のやつがS・K〔鈴木克子〕さんに本当に惚れちゃってね、いいところまで行ったんだが、僕がアレコレ指南してやったにもかかわらず、結局失恋しちゃうんだ。そして最後にはピストルを持ってその家に出かけていき、娘と母親をねらって撃つんだが、これが当たらないんだな。そのうちにくわえていた青酸カリがきいてきて死んじゃった、とこういうわけさ。覚えているだろう、この事件。

倭文重 きっとお肉だけに目がくらんでいるあなたの指南がわるかったのね。K子〔克子〕さんという人は美人だったけれど、コケッ तरीでね、学校でも男の先生と見ると甘えて膝に乗っちゃう人だったわ。お姉さん〔隆子〕もきれいでね、雨が降ると傘を持って迎えにくるんだけど、先生たち、あまりの美しさに呆然としていたようだったわ。

梓 僕は姉さんのほうは気がつかなかったな。覚えているのは肉のうまさだけだ。

倭文重 ロマンチックのかけらもないんだからいやになっちゃう。

平岡梓の語る金田一人の自死当日の様子は、事実と異なるが、ともあれ、彼の言によれば、平岡梓のほか岸信介も、金田一人が克子と婚約する以前から、鈴木家に出入りしていたようである（一高時代のことか）。

（6）三女・治子

三女・治子は、明治40年3月生まれ。『人事興信録』の「第8版」（昭和3年）ス

82頁では未婚であるが、「第9版」(昭和6年)ス67頁には「同〔東京〕府人山口明に嫁せり」とある。夫は『日本紳士録(第46版)』(交詢社、昭和17年)東京ヤの部482頁「山口明 鉄道省経理局審査課長、牛込、赤城下34」であろうか。

(7) 四男・重通

二男・三男の名前は、明治44年刊行の『人事興信録(第3版)』す44頁に掲載されていないので、同年以前に兩人とも夭折したのであろう。

四男・重通は、明治45年3月生まれ。彼に関しては、金田一春彦⁽¹⁷⁴⁾の文章中に、次のような記述がある。

……。鈴木家は、お茶の水の、現在順天堂病院の敷地になっている一部に、豪壮な邸宅を構えていた。

私も叔父〔金田一他人〕に連れられて遊びにいったことがあったが、玄関を入ったすぐの所に、南洋の極楽鳥の置物が飾ってあった。私がポカンと眺めていると、年の頃は私と同じくらいの当家の子息が出て来て〔金田一春彦は、四男・重通より1歳年下の大正2年4月3日生まれ〕、この薄汚い訪問者にちょっと驚いた顔をしてから、「これ何だか知ってるかい?」と鳥をさして聞いた。「知らない」と言うと、「これ、ハクセイって言うんだぞ」と肩をそびやかした。私は、すっかり圧倒されて、ハクセイという名の鳥がいるのかと思い、へーエと感嘆の声を洩らしたが、その家の中にあるものは、何でもかんでも世界の逸品を並べたてたように、珍しく高価そうに見えた。いわんやその家にいる女性などはまるで殿上人を見るようで、華やかな着物を身につけ、つややかに頭を結びあげ、優雅な言葉遣いで話す人がそばに来ると、それだけで良い香りがあったりに漂い、私などはりっぱな西洋菓子をすすめられても、食べたそらはしなかった。

(8) 五男・重雅

五男・重雅は、大正9年3月生まれ。我妻栄や岸信介の卒業する年(大学3年の森戸事件の最中。金田一他人は大学2年)の誕生である。

【正誤】 連載(4) **【追記】** ④「大正10年3月(鳩山留学後)」とあるのは、鳩山「渡欧」後の誤り。

(174) 金田一春彦・前掲注(156)262頁。